
流浪の三千院家・・・・・ 戦う執事

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流浪の三千院家・・・・・戦う執事

【Zコード】

Z67880

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

日本で起きた革命によって外国へ移住したハヤテの仕える三千院家。しかし、そこももはや安住の地ではなく・・・・ハヤテのごとくーのキャラクターによる、別世界の太平洋戦争戦記ーー！

プロローグ（前書き）

この作品はキャラクターや設定などすべて一ですが、話は全く違うので、特に戦争系がダメな方はおやめください。

プロローグ

1944年10月 ハワイ・オアフ島 三干院家別荘

この日、一人の青年がこの地を旅立とうとしていた。その少年を一人の女性と、一人の初老の男性が見送る。

「行くんだな？ ハヤテ。」

少女のうちの一人、金髪の少女が青年に語りかける。

「はい、お嬢様。今日まで本当にお世話になりました。」

「ハヤテ君。そんな二度と帰らないようなセリフやめてください！」

メイド服を着込んだもう一人の少女が、ハヤテと呼ばれた少年に言つ。

「すいません、マリアさん。大丈夫、僕だって簡単に死ぬ気はありません。日本を取り戻したら、お嬢様の執事として、また一緒に皆さんと暮らしたいですし。」

そして、金色のボタンがついた純白の制服を着込み、頭には錨をあしらつた帽子をかぶる青年は3の方に振り向き、踵を合わせ、直立不動の体勢で見事な敬礼をする。

「帝国海軍、飛行兵曹長綾崎ハヤテ。行きます。」

その言葉に、初老の男性が前に出て言った。

「行きますは死に行く者が言つた言葉だ。行つてきますと言え。」

その言葉に、ハヤテは少し考え込んだが、すぐに顔を上げた。

「…………行つてきます。皆さんもお元気で。」

「ハヤテ、絶対に帰つて来いよ。」

少女の切実なる願いである。

「ありがとうございますお嬢様。絶対に僕は帰つてきます。それで
は。」

そして少年は歩き始めた。一度と後ろを振り返ることなく。

昭和16年10月。天皇の強い意思により、日本は米国との出した最後通牒を飲むことで、対米戦を回避した。ここから歴史が大きく動き出した。

しかし、そのわずか半年後、それを不服とした陸軍が反乱を行つた。さらに、そのドサクサに紛れ込んでソ連が反乱に介入した。

中国から撤退した部隊の整理などの混乱の中で行われた突然のクーデターを、政府は鎮圧できなかつた。結局、2カ月後に反乱軍が東京を制圧し、日本社会主義共和国の設立を宣言した。そのため天皇を始めとする帝国政府は、当時日本が委任統治領としていたマーシャル諸島のトラック島に脱出した。

この時から、帝国VS共和日本の戦いが始まった。

そしてその戦争という歴史の荒波は、全ての日本人を巻き込んだ。そこに決して例外はなかつた。例えそれが金持ちの令嬢や、そこに使える執事やメイド、その友人たちであろうと。決して。

そういうわけで、日本有数の大富豪である三千院家も海外への脱出を行わざるを得なかつた。資本家は社会主義体制では肅清の対象になることを聞いていたからだ。

結局、ナギたちは日本にあつた財産の多くを捨て、ハワイにあつた三千院家の別荘に逃れた。ナギにとっては屈辱以外の何物でもなかつたが、生命の安全を脅かされている状況ではどうにもならなかつた。彼女はマリアやクラウスとともに、住み慣れ愛着ある屋敷か

ら出るしかなかつた。

ナギたちにとつて幸運だつたのは、クーデター政府は天皇や資本家、さらには日本の社会主義化に反対する人間が海外へ脱出する時間的余裕を与えてくれたことだ。

そしてナギたちはハワイへと移り住んだ。しかし、そこももはや安全ではなかつた。日本社会主義共和国（以後共和日本）は昭和18年12月8日に対米宣戦布告し、ハワイを空襲した。ハワイ各所の米軍基地、さらに日本領から脱出してきた帝国陸海軍航空隊は壊滅的な打撃を受けた。

幸いナギたちは何の被害もなかつたが、彼女らは戦争の影が直傍まで忍び寄つてきているのを実感せずにはいられなかつた。その後ハワイでは、共和日本が侵攻してくるという噂が広がつた。

さらに、三千院グループ自体も日本の社会主義化やヨーロッパにおけるナチス・ドイツの侵略によつて、中東とアメリカ以外の市場を失つたに等しい状況にあり、その财力は目に見えて落ちていた。いくらナギの祖父である御門ががんばろうと、それにも限界があつた。

そして、三千院家最後の砦といえる中東の油田地帯にもドイツとソ連が迫つていた。ここを失うと、もはや三千院家に未来はない。

そんな中で、亡命してきていた大日本帝国政府の海軍、すなわち日本帝国海軍は打倒共和日本を掲げ、米国との共闘を決定した。日本本土から脱出した連合艦隊の半分が米太平洋艦隊に合流し、東へと進まんとしていた。

一方日本籍であるハヤテも、もうすこしで徴兵年齢（20歳）に達する。そこで、彼は結局、いざれ徴兵されるならと考へ海軍へ志願した。日本を取り戻すことが三千院家のためにもなると考へたからだ。

もちろんハヤテが死ぬ危険性があるから、ナギは猛反発したわけだが、最終的にクラウスやマリアが説得を手伝ってくれたおかげで折れた。クラウスやマリアもハヤテが軍人となることに賛成という訳ではなかつた。しかしながら、同じ軍人になるならば本人の意思を尊重するべきだと思ったのだ。

その後ハヤテは予備士官（戦時に士官が不足するさい、学生などをその間だけ士官として採用する臨時雇い）募集に応募し合格。飛行兵へ進み、飛行学校や訓練部隊で1年の訓練を行つた後、准士官（士官と下士官の間の階級）に任官した。そして、今彼は部隊に配備されて戦場へと赴こうとしていた。

戦場へ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお、帝が御門になつてゐるのは戦前の不敬罪に当たると考えた
からです。

ナギ達に別れを告げ、軍に戻ったハヤテは、その3日後には新たに新たな辞令を受けた。

「綾崎ハヤテ飛行兵曹長 空母「麗鳳」戦闘機隊配属を命ず」

実戦配備の通知であつた。いよいよ戦場へ赴くときが来たのである。ハヤテは遺書を書き、その時に備えた。

さらにその翌日、隊の配置の割り振りが掲示された。ハヤテの配置は第一中隊、12機編成の3番機であった。そして、その日の内に慌しく空母への移動となつた。

「本日より、この坂井少尉が中隊の指揮を執る。」

隊員同士の顔合わせもないまま、中隊長の坂井三郎少尉から簡単な説明が行われた。そして短い訓示もなされた。本来こんなことはないのだが、パイロットが不足しているのでこのようになつた。

「搭乗せよーー！」

坂井少尉の号令の下、ハヤテ達パイロットはそれぞれの機体に乗り込む。

ハヤテ達が乗り込むのは紫電改と呼ばれる日本からの「命技術者」と米国企業が共同開発した新型の戦闘機である。2200馬力のエンジン、そして12・7mm機関銃を6基積んだ強力な戦闘機だ。

ハヤテは乗り込むと素早く計器や舵に異常がないか確認する。全て異常なしであった。それを確認すると、エンジンを起動する。

「コンターック！！」（英語のコンタクトが訛った言葉）

日本海軍独特的掛け声とともに、エンジンの始動ボタンを押す。2200馬力のエンジンは快調に回り始めた。

数分、暖機運転（エンジンを温めるためのアイドリング）を行つと、発進始めの旗が振られた。ハヤテは両手を大きく振る。整備員がそれを確認すると車輪止めを外す。

1番機から順に機体を滑走路に進め、そして飛び立つしていく。間もなく、ハヤテの番になった。

「行くぞ！！」

滑走路に入るとスロットルを一杯に押して、エンジンの出力を最大に上げて飛び上がる。アメリカ製の大馬力エンジンは、機体を強力な力で引っ張る。

グングン高度が上がる。

振り返ると、間借りしていた米海兵隊のエヴァ航空基地がどんどん小さくなつていく。

編隊は一列に並んで海上に出て、母艦へと向かう。出撃前の説明によれば、ハヤテが今回乗り込む母艦である「麗鳳」は早朝に真珠湾を出港しているから、既にかなり沖を走つているはずであった。

しばらく飛ぶと、前方から一機の飛行機が飛んできた。雷撃機の「天山」であった。その「天山」は旋回すると、戦闘機隊の前に出てバンクをした。どうやら母艦まで誘導してくれるらしい。

その「天山」がハヤテの側を通り過ぎた。その時、ハヤテはその機体のコックピットに懐かしい顔を見た気がした。

「まさか！？」

ハヤテは思わず声を上げてしまった。だが、確認する暇もなくその機体は隊長機の前に出てしまった。

そして、20分ほど飛行すると、艦隊が見えてきた。全部合せると30隻近い大艦隊であった。それら艦隊は巨大な円形の輪陣形を作っているが、その真ん中に大型の空母が2隻いる。

「天山」は左側の空母にハヤテ達を誘導する。

発進時と同じように1番機から順々に着艦する。先の機体が完全に降りるまで、残りの機体は上空でグルグルと旋回する。

そしてハヤテの番になる。

着艦は発進の何倍も難しい。もし少しでもスピードや高度を誤ると、甲板上で止まれず海へドボンと落ちたり、艦尾に衝突したりすることもあり得るのだ。

だが、ハヤテは綺麗に着艦する。さすがに、体力や反射神経が抜群なだけある。

着艦すると、次の機体の邪魔をしないため機を前に出す。そして、所定の位置についたところで整備兵に機体を任せて、彼自身は機体から降りる。ここから先は整備兵の仕事である。

ハヤテは先に降りた隊員たちの所へと歩き始めた。その途端、後ろから声をかけられた。

「さすが三千院家の執事君。すばらしい着艦だつたね。」

出擊（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

懐かしい人々

聞き覚えのある声だった。

「野ノ原さん！！」

ハヤテが振り返ると、そこに懐かしい人物が立っていた。野ノ原楓。東富家の執事である。革命後の消息は知らなかつたが、その彼が今ハヤテの目の前に、自分と同じ飛行服姿で立つていた。

「久しぶりだね。」

「あなたも軍に入つっていたんですか？じゃあさつきの「天山」のパイロットは？」

「そう、僕だよ。革命のせいで、東富家は財産の殆どを失つてしまつてね、僕も失業して。今のご時世、就職できるのは軍ぐらいしかなかつたからね。」

その表情はどこか悲しげであった。

「じゃあ、僕は雷撃隊の自分の部署に戻らないといけないので。それと、今は君の方が階級は上なので、敬礼は不要ですか。」

「えー？」

野ノ原のよく飛行服の階級章を見ると、ハヤテよりも一階級下の一飛曹であった。そして野ノ原は艦内へと入つていた。

「野ノ原さんも軍に入っていたんだ・・・・・・他のみんなはどうしたのかな?」

ハヤテが三千院家についてハワイへ亡命したあと、かなりの知り合いの行方がわからなくなつた。確実にわかっているのは、アメリカへ渡つた咲夜と伊澄ぐらいた。ヒナギクと歩は海外への逃げ道が無く、今も日本に残つていると聞く。

そうやつて感慨に深けていたハヤテに、罵声が浴びせられる。

「綾崎!..何をしどる!..集合だ!..」

「あ、はい!..」

見ると、他の隊員たちは列を作つて集合している。ハヤテも慌ててその中に加わる。

その隊員達の前に、大佐の階級章をつけた男が立つ。

「坂井少尉以下12名、ただ今を持つて空母「麗鳳」着任を報告します!..」

「1)苦労。俺は飛行隊長の淵田大佐だ。よろしく頼むぞ!..」

「敬礼!..」

ハヤテを含む12名の隊員が敬礼する。

「解散!..」

着任の挨拶が終わり、簡単な部屋割りの指示を受けたあと、その場で解散となる。

ハヤテも自分に割り当てられた部屋へ向かおうとする。艦上ではまだ飛行機の収容が続いている。今も、ハヤテのと同じ紫電改が着艦する。

「第一中隊か……確かにホイラー飛行場から発進した部隊だつたな。」

上官から説明されたことを思い出す。しばし、第一中隊の着艦を見ていたが、7番目に着艦しようとしている機体を見て、表情が変わる。

「おじおじ、スピードが速すぎる……」

その機体は明らかにオーバースピードで着艦しようとしていた。しかし、直前のところで機首を上げた、どうやら誘導の合図に気付いたらしい。

「危なかつた。あのパイロット、絶対に怒られるぞ。」

案の定、着艦したそのパイロットに、上官が叱責しているのが見えた。

そのセリフの中で、ハヤテの心を引いた一言があった。

「何をやっているか……タチバナ（飛曹）……」

懐かしい人々（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

「タチバナ！？」

まさかと思った。そんなに偶然が重なるはずがないと。

その搭乗員は上官の叱責が終わると、機体から出て飛行帽子とゴーグルを取った。まだ少年と言って差し支えないその人物は、ハヤテがまさかと思った人物だった。

「ワタル君！」

かつてのナギの許婚であり、橘財閥の後継ぎである橘ワタルだった。

ワタルも、ハヤテと同じように着任の挨拶をした。そして、解散した所でハヤテが声を掛ける。

「ワタル君！」

その声に、ワタルも気付いた。

「借金執事！？」

最初ワタルはそう答えたが、すぐに訂正した。

「あ！失礼しました。綾崎飛曹長！！」

そしてそのまま敬礼する。

軍隊においては階級は絶対である。今のハヤテはワタルより一階級高い位である。その相手にいきなり借金執事と言つるのは非常にマズイ。だから訂正したのだ。ハヤテもそれはしっかりとわかつていた。すぐに返礼の敬礼をする。

「お久しぶりです。取り合えず、IJIは話しにくいから、ちょっと移動しましょう。」

ハヤテはワタルを連れて、人気のない通路に移動した。

「IJIなら気兼ねせず話せますね。改めて、お久しぶりですワタル君。日本を脱出していたんですね。」

「ああ。けど驚いた、借金執事が飛曹長の階級つけてているから。俺はてっきりナギの所で執事を続けているからと思つたぜ。」

「どうせ徵兵されるならと思つて志願したんです。それよりも、まさかワタル君も軍に入つたなんて。IJIちこを驚きましたよ。」

その言葉に、ワタルの表情が少し暗いものになる。

(聞いちゃいけなかつたかな?)

「家つてさ、倒産寸前だつたじゃん。だから、アメリカに逃げたはいいけど資産なんかないからさ、だから・・・」

皆事情は似ているようだ。

ハヤテは話題を変えることにした。

「ところで、ワタル君は他の人のこと知りませんか？」

「ああ。いっちも脱出するだけで精一杯だつたから。ただ、サキの奴は親の事情で日本に残つたぜ。他の奴については一切わかんない。・・・・・・・・・・そういうえば、借钱執事はある噂聞いたか？」

その言葉に、ハヤテは全くわからなかつた。

「噂つて？」

「共和日本が女子の徵兵を始めたつてやつ。まさかとは思うけど・・・・・・サキ、いや誰か知り合いと殺し合いにならないかなつて心配してんんだ。」

ハヤテも少しばかり思い出した。

（そういういえばソ連じや女性も軍隊にいれていのつて言つしな、けど、まさかね。）

「大丈夫ですよ。そんな事ありませんよ。」

とりあえずそう言つたハヤテであつたが、戦乱はそんな希望を聞き入れてはくれなかつた。

帝国海軍が乾坤一擲の作戦を挑もうとしているころ、それを察知した共和日本、厳密にはその背後のソ連も臨戦態勢を取っていた。ここ横須賀軍港に停泊している艦艇も次々と出撃準備を整えていた。その中に、空母「紅燕」もいた。

「この空母、乗員の9割が女性という異色の軍艦である。

帝国海軍の3分の2近くが逃げ出したため、海軍は深刻な人材不足となつた。そのため、女性を徴兵して数合わせしたのだ。

その甲板上に、二人の飛行服姿の女子兵が立つていた。

「いよいよ出撃だねヒナさん。」

「そうね歩。」

もうおわかりと思うが、西沢歩と桂ヒナギクの一人だ。ワタルの悪い予感はある意味当たつていた。ちなみに、階級はヒナギクが少尉で歩が軍曹だ。

一人は、革命が起きた後日本を脱出できずにそのまま留まつていたが、軍に志願した。もつとも、実際は強制で、名ばかりの志願であつたが。

実は、二人とも身内が反社会主義の容疑で収容所に入れられてしまつている。彼らの命を延ばすには、残つた彼女らが手柄を立てる以外に方法はなかつた。

ヒナギクは2回、歩は1回。それぞれ実戦を経験し、ヒナギクが4機、歩が1機の撃墜記録を持っている。

「ねえヒナさん。今度は私たち「亡命軍と戦うのかな？」

「亡命軍。共和日本軍兵士たちは、亡命した帝国軍をそう呼んでいる。その亡命軍と戦うことは、誰もが避けたいことであった。二人とも、これまで敵がアメリカやイギリスであったが、今回は亡命軍と戦うという噂が立っていた。

その言葉を聞いて、ヒナギクは慌てて、歩の口を塞いだ。

「歩ー滅多なこと言わないの、政治士官に聞かれたら即逮捕よーーー！」

政治士官とは、共産主義の信条に反する軍人を取り締まる軍警察のことだが、場合によつてはその場で射殺することもある。今の歩の一言は明らかに国家の方針への疑問である。それを口にすることは、逮捕の理由に充分なる。逮捕されれば良くて監獄送り。悪ければシベリアへ送られて死ぬまで泥炭堀だ。

「私たちは命令で動くだけよ。それ以上もそれ以下もないわ。変な考えは起じられないことね。」

「ヒナさん・・・・・」

かつてのヒナギクだつたらありないセリフだが、もちろん歩は本音でないくらいわかる。収容所に捕まつている姉の雪路、そして監視されている養父たちのためには、彼女はこうするしかなかつた。

過酷な時代は、少女たちの人生を、大きく狂わしていた。

運命の糸（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ハヤテの乗つた空母「麗鳳」は補給と、他艦隊との合流のため、現在も帝国領である中部太平洋の拠点のトラック島に寄港した。トラック島は東洋のジブラルタルと呼ばれた天然の良港で、多数の艦艇が集うにはうってつけの泊地であった。

「うわあ！」

ハヤテはその光景を見るなり感嘆の声をあげた。

海を圧するばかりの大艦隊の姿があった。帝国海軍連合艦隊、そしてアメリカ海軍太平洋艦隊主力が一同に集まつた姿であった。ちらほりと、カナダやオーストラリア海軍の艦艇も停泊していた。

戦艦、空母、巡洋艦に駆逐艦。上陸部隊を運ぶ輸送船など、100隻近い艦艇がそこにいた。

その日の夜、ハヤテには上陸許可が出された。もつとも、ハヤテは酒にも女にも興味がない人間であるから、ただぶらぶら散歩をしていただけであったが、そんな中で、またも懐かしい顔と出会った。

「おお！ハヤテじゃないか！」

突然、一軒の居酒屋の前で声を掛けられた。見ると、数人の下士官が酒を飲んでいたが、その中の一人に、見覚えのある人物がいた。

「ソウヤ君！？」

ハヤテの元同級生のソウヤであった。

「久しぶりだな。」

ソウヤは一飛曹の階級章をつけていた。

彼から聞いた話によると、彼はアメリカ移民の親戚がいたので、そのつで脱出できたらしい。

結局、ハヤテは宴会を邪魔してはいけないと足早にその場を去つたが、この日も何かの偶然かわからないが、懐かしい人々とたくさんあつた。

大河内家の執事だつた氷室や、ハヤテの忌み嫌う元瀬川家執事の虎鉄である。そして、驚くことに、この二人は野ノ原の機体に乗つていた。（雷撃機は通常3人乗り）

案の定、ハヤテに言い寄つた虎鉄は、そのハヤテによつてボコボコにされた。

この二人と別れたあとには、あのヤクザ3人組とも出会つたし、その他にも数人の顔見知りの人々と出会つた。しかし、その度に、ハヤテの胸に浮かぶ想いがあつた。

（この人たちとは、もう一度と会えない気がする）

それは彼らが死ぬのか、それとも自分が死ぬのかはわからなかつたが、そういう考えがハヤテの中で大きくなつたのは事実であつた。そして、それは現実となろうとしていた。

」の一日後、日米連合艦隊は出撃した。

同じ日、ヒナギクたちの乗る空母「紅燕」も横須賀を出撃した。この数日前、補充兵が乗り込んできたが、その人物たちを見て、ヒナギクは呆れてしまった。

「あんたたちとまた一緒になるとは思えなかつたわ。」

そんな彼女とは対照的に、乗り込んできた女性兵たちはにこにこ笑っていた。

「ヒナちゃんと一緒になるなんてこつちだつて思わなかつたよ。」

「偶然とは恐ろしいな。」

「美希の言うとおりだ。」

セリフから見てもわかるとおり、生徒会三人娘だ。三人とも革命後は音信不通になつていたが、まさかこんな所で出会つとは。

もつとも、ヒナギクには3人が相当な苦労をしたのは簡単に想像できた。

泉は資本家の家庭であつたし、美希も帝国時代の政治家の娘である。おそらくかつてのよつたな特権は全て剥奪されたはずだ。また、

理沙の神社も閉鎖されたはずだ。共産主義は事実上宗教を否定するからだ。

だが、そんなことも全く表情に出さず、かつてと同じ笑顔を見せる3人に、ヒナギクは嬉しくも思つた。だが、この娘たちと一緒にはある意味嬉しいが、それは死の危険性をはらむもの。内心非常に複雑だつた。

それをより大きくしたのは、さうい、千桜と愛歌に会つた時であった。

「何であんたたちまで！！」

「ここまで来ると偶然どころではなかつた。何か運命めいた物を感じる。そして、より不安が大きくなつた。

もつとも、乗ってきた連中はあまり緊張感がなく、かつての学生の時と同じように会話していたが、ヒナギクの不安を、それはより助長した。

（あの娘達の内、何人が生き残れるのかしら？）

それでも、ヒナギクは冷静に努めようとした。あくまでそんな物は自分の取り越し苦労だと。

だが。悪い」とは翌日から起きた。

小笠原沖を南下している時であつた。ヒナギクは、歩と一緒に甲板で談笑していた。その最中、突然。

ドグワーン！！

大音響と爆風を彼女らを襲つた。

「何！？」

その疑問には、歩が答えた。

「ヒナさん。「飛燕」が！！」

「飛燕」は「紅燕」と戦隊を組む空母で、やはり乗員の9割が女性である。ヒナギクも何回か会議参加の為に乗り込んだ。ヒナギクが見ると、「紅燕」の300m後ろを走っていたはずの「飛燕」は跡形も無く消え去っていた。

「な！？」

潜水艦の魚雷攻撃だった。4本が命中し、真っ二つに折れての轟沈であった。その後駆逐艦が生存者の捜索をしたが、生存者は・・・

・・・ゼロ。

まるでこれから起きる戦いを象徴するような不吉な出来事。そして、泉達のように、乗り込んできた兵士たちが見せ付けられた戦争の現実だった。

過酷な運命（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

それぞれの想いを胸に

ハヤテやヒナギクたちがそれぞれ複雑な想いを胸に、戦場に向かつたころ、同じように動き出した少女たちがいた

「ナギ、本当に大丈夫なの？今ならまだ降りられるわよ。」

三千院家のメイドのマリアが、傍らにいる、主人であるナギに声を掛ける。

そのマリアは、この時メイド服を着ていなかつた。頭に赤十字が描かれたキャップを被り、足元まである長いスカート履いている。上下真っ白の服。白衣の天使という言葉が似合つその格好、従軍看護婦の服であつた。

そして、傍らのナギも同じ格好をしていた。そう、彼女らはこれから従軍看護婦として戦場へ出ようとしていた。

「マリア、それなら何度も話し合つただひつー私の決意は変わらな
い。」

「けど。いくらハヤテ君に近づきたいからって、あなたが行くことは無いのでは？もつ一度言ひなご。今なら間に合うのよ。」

「しつこいマリア。私は覚悟を決めたのだーー！」

ナギの決意は固い。

さて、何故一人が従軍看護婦になつているのか言うと、話は半年

前に遡る。ハヤテを軍に送り出したナギは、何も出来ない自分を無力と感じていた。そんな折に、新聞に臨時雇いの従軍看護婦募集の案内が載った。

そこでナギは考えた。従軍看護婦なら戦場に出られる。つまりはハヤテに近づける。もしかしたらハヤテに会えるかもしれない。

そして彼女は勝手に申し込んでしまった。そして、見事採用された。慌てたのはそれを知ったマリアである。なにせナギは頭はいいが、実務的なことは殆ど出来ない、加えて17年間お嬢様として暮らしてきたのだ。看護婦はイメージは良いが、実際は相当過酷な役目の職種だ。そんな職種にナギが耐えれるはずがないと考えたのだ。

しかし、マリアの説得にも全くナギは耳を貸さなかつた。結局、屋敷のことをクラウスに任せて、お田付け役として、マリアも志願することとなつた。

そして半年の研修期間を終えて、彼女たちは今までに特設病院船である「氷川丸」に乗り込もうとしていた。彼女たちも、また自らを過酷な戦いの流れへと投じようとしていた。

それから3日後、ナギとマリアがそのようなことをしていると、全く予想できていない執事こと綾崎ハヤテは、初めての出撃をしようとしていた。

ハヤテの乗る空母「麗鳳」では攻撃隊の発進準備が進められてい

た。

「^{エンジン}発動機回せ！！」

命令とともに、空母「麗鳳」の飛行甲板（空母の飛行機を飛ばすための甲板）上の飛行機が一斉にエンジンを始動する。

「搭乗員集合！！」

ハヤテを含むパイロット達が整列する。上官の訓示を聞くためだ。パイロットが整列すると、特設の壇上に戦隊司令官の貝塚武雄少将が上がる。

「諸君！ 今回の攻撃は対地攻撃（陸上への攻撃）であるが、敵戦闘機の妨害は充分に予想される。同じ日本人同士の殺し合いも只得る。だが、戸惑つてはいけない。相手が誰であろうと敵だ！！苦しいだろうが、明日の日本の為に、今の辛酸に耐えてくれ！ 以上だ！！」

「敬礼！ ！」

ハヤテを含め、全員が一斉に敬礼した。

「本日の指揮は、この村田少佐が執る！！ 時計を合わせる。0600（マルロクマルマル）15秒前・・・・・10秒前・・・・・5秒前、用意、テ！ ！ 掛かれ！ ！」

全員が腕時計の時刻を合わせて、機体に乗り込む。

ハヤテも自分の紫電改に乗り込んだ。

「バッヂリ整備しました！！」

若い整備士が乗り込んだハヤテに声を掛けてきた。

「ありがとう。」

その整備士が敬礼をしてコックピットから離れると、ハヤテは懐から一枚の写真を取り出し、操縦席の計器版に貼り付けた。ハワイの写真館でナギやマリア達と一緒に撮った物だ。

彼女たちの笑顔に寂しげな表情を一瞬向けると、ハヤテは飛行眼鏡をつけた。そして写真の2人に向かって語りかけた。

「行つてきます。お嬢様、マリアさん。」

それぞれの想いを胸に（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

今回の日米連合の大作戦は、両海軍の保有する全ての戦艦、正规空母（高速大型空母）を動員したものであった。

日本本土を爆撃圏内に納めるマリアナ諸島と硫黄島を奪取し、出動していく敵艦隊の殲滅がその主な目的であった。

ハヤテ達の乗る空母「麗鳳」は作戦開始の日、硫黄島南西300kmの海域にいた。

ハヤテの所属する第一戦闘機中隊は当初直掩（艦隊や基地を直接守ること）任務の予定だったが、昨日の夕方、硫黄島からやつてきたと思しき陸上機の奇襲爆撃で空母「加賀」が戦線離脱し、航空機が不足したため、急速硫黄島攻撃隊の護衛を命じられた。

「攻撃隊発艦始め！！」

攻撃隊に発進命令が出る。通常攻撃隊は戦闘機から出る。今回もハヤテの戦闘機部隊が最初に発艦する。

既に「麗鳳」は風上に向かつて艦首を向けていた。通常、プロペラ機でも発進するときは1000m近い滑走路が必要となる。しかし、狭い空母の上では滑走距離はせいぜい50m程度だ。そのため、空母は風上に向かつて全速で走り、必要な風力、合成風力を起こす。もともと、アメリカ製のこの空母にはカタパルトが装備されているが、念には念を入れてだ。

発進の合図を示す白い旗が振られ、まず最初に中隊長の坂井少尉

がカタパルトから打ち出された。

続いて2番機が発進する。そして、3番機。ハヤテの番だ。

ハヤテはカタパルトに機体を進める。そして機体のカタパルトへの固定を行い。打ち出しどなる。

エンジンの出力を最大にする。今回は対地攻撃任務のため、翼に合計20000ポンド（約900kg）の爆弾を吊り下げている。注意しなければいけない。

白い旗が振られる。その瞬間、ハヤテをすさまじい衝撃が襲った。それに耐え、操縦桿を引く。

次の瞬間には、ハヤテの紫電改は中に浮いていた。

「ふう。」

発艦成功に、取り敢えず肩の力を抜く。そして後続の機体、ワタルの乗る紫電改に眼を向けた。

昨晩の急な編成替えで、ハヤテの中隊にワタルが編入されていた。彼はハヤテとコンビを組む。

そのワタルも無事発艦に成功し、上昇していく。

中隊の12機が揃うと、高度を4500mに保ち、V字型の編隊を組む。

速度を150ノット（時速278km）に固定する。これ以上

速くでも飛べるが、他の爆撃機や雷撃機を置いてきぼりには出来ない。

空には雲は少なく、天気は快晴である。

「綺麗だな・・・」

ハヤテがふとそんなことを呟いた。

空は晴れ、眼下には太平洋の青い海が広がる。確かに美しい、戦争でなければ、そのまま見入ってしまうだろう。

「お嬢様にもいつかいつこう景色を見せてあげたいな。」

そんなことを考えているうちに、時間は過ぎていった。

発進して50分ぐらい経つたころ、隊長機から通信に入る。

「各機へ、まもなく硫黄島上空である。爆弾と機銃の安全装置解除！機銃は試射を行え！――」

いよいよ戦場である。ハヤテはまず爆弾の安全装置を解除する。これで爆弾は投下すると自動的に爆発する。

次に、機銃の安全装置を外して弾が出るかチェックする。1秒間だけ発射ボタンを押す。

ダダダ・・・・・

6挺の機関銃からはしっかりと弾が出た。

「良し。」

準備は完了した。

戦空（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

空中戦

攻撃目標の硫黄島が見えてきた。ハヤテは周囲を警戒する。いつ、どこから敵戦闘機がやってくるかわからないからだ。

空はそれなりに晴れでいて、視界は良い。それなのに敵は全く見当たらない。

「静か過ぎる。」

硫黄島にさしかかると接近するが、相変わらず敵がやってくる様子はない。

そして、ハヤテはより不可解な事態に直面した。

「どうこいつことだ？ 対空砲をえ擊つてこないなんて？」

硫黄島からまったく反撃と思えるものがない。一発も撃つてこない。

ハヤテがそんなことを考えていると、先行した偵察機からの通信が入る。

「攻撃隊に告げる。硫黄島に敵影見えず。繰り返す敵影見えず。」

つまり、硫黄島はもぬけの殻とこいつことだ。

「連中昨夜の内に撤退したようだ。全機へ、適当に爆弾を投下せよ。投下後は急速上昇して上空警戒。」

隊長機からの連絡が直ぐに入った。

ハヤテは素早く無線機を受から送に替える。後ろについたてこいのワタルと交信するためだ。

「ワタル・・・橋一飛曹聞こえるか？」

ワタル君と言いかけ、慌てて直す。送の状態では他の機体にも聞こえている。会話は注意しなければいけない。

（けどワタル君に命令口調を使うのは何か気が引けるな。）

ふとそんなことを考えてしまつ。

「はい飛曹長。良く聞こえています。」

ワタルからの返事は直ぐに返ってきた。

「これより滑走路を爆撃する。しつかりついてこい。」

「了解――」

ハヤテは直ぐに無線機のスイッチを元に戻し、降下に入った。

高度を500m位まで落とし、水平飛行に入る。

事前偵察では硫黄島には元山と千鳥の2つの飛行場があった。ハヤテが目標としたのは元山飛行場の方だ。

飛行場を見てみると、確かに人っ子一人見えない。滑走路の脇に飛行機が何機か見えるが、故障か何かで放棄された物のようだ。

滑走路に狙いをつけ、ハヤテは爆弾投下のレバーを握る。

「よーい、撃て！！」

適当な所でレバーを引く。

その瞬間、900kgの爆弾が落ちるので、機体が一瞬軽くなり、フワット浮き上がるような感覚を覚える。

そして数秒後には腹に伝わるような衝撃が伝わってきた。

後ろを振り返ると、ワタルの機体と、滑走路に立ち上る4つの火柱が見えた。ワタルもちゃんと投下したらしい。

それを確認すると、ハヤテは上昇に移った。この低高度に降りたときが一番危うい。早めに高度を取らねばならない。

仲間の機体も既に爆弾を投下し、上昇している。ハヤテ達は素早くその中に加わって編隊を作る。

高度が4000mあたりまで上がった所で、再び周囲を警戒する。

まだ後続の爆撃機や雷撃機が硫黄島を爆撃している。こんなところを襲われたらひとたまりも無い。

神経を集中させる。

すると、北のほうの空にシールのような物が見えた。すかさず無線機に手をかける。

「 ひづら綾崎、右舷2時方向に不審物！ ！」

戦闘機かは断定できないので、取り敢えず不審物とだけ報告する。

すると、すぐに隊長機から通信に入る。

「 全機へ、あれは戦闘機だ！ 増槽投下！ 高度4500まで上昇 ！ ！」

増槽とは、飛行距離を伸ばすために取り付ける使い捨ての補助タンクだ。もちろん、空中戦の時には空気抵抗によって性能を低下させるだけなので、捨てなければいけない。

ハヤテも急いで投棄レバーを引いた。

ガコーンという音がした。

そしてスロットルを一杯に押してエンジンの出力を最大にする。

速度と高度がグングン上がる。

（ワタル君は？）

チラッと後ろを見てみると、しつかりついて来ていた。

（よし。）

すると、隊長機からの無線が入る。

「全機へ、相手は約20機、飛燕だ！…恐らく共和日本機だ！…同じ日本人でも容赦するな、やらなきゃやられるだけだぞ！…ロッテを崩さずに戦え！…以上！…」

見ると、敵との距離はすでにかなり縮まっていた。そして、相手の翼やチカチカと光るのが見えた。発砲したのだ。

すぐに全機回避運動に入る。

(ワタル君！ついてきてください！)

ハヤテはすれ違うように飛んできた敵に対し、弾をよけながら急旋回をして、相手の後ろを取つた。

ほんの数秒のことである。ひとつでも動作を間違えば錐揉みしかねない、それをハヤテは巧みな操縦で行つた。

一方、後ろからついていくワタルはたまたた物ではない。

「いきなりかよ、借金執事！…」

もちろん、ワタルにはついていけるレベルではない。ワタルの機体の旋回は大回りになり、速度も落としてしまつた。これによつて、ハヤテから引き離されてしまう。

ワタルがそんな状況に陥つたころ、ハヤテはすでに敵の一機に喰らいついていた。

戦闘気乗りにはある鉄則がある。それは相手が人間が乗っていると考えないこと。ただの標的にしか考えないことである。撃つの一瞬でも躊躇すれば、それはそく命取りになる。

しかし、ハヤテはやはり人を殺す気にはなれなかった。

機関銃の発射モードを2挺だけ使うものに換え、急所に狙いを定める。

ハヤテが狙ったのはエンジンの冷却器であった。

今回戦っている相手の飛燕は、水冷エンジンの戦闘機で、機体にでかい冷却器がついている。これをやればエンジンは自動的に止まる。

ハヤテはそこへ狙いを定めて2秒間だけ撃った。

銃弾が空中を走る。

そして、命中したのかその飛燕は力尽きるように落ちていった。その途中でパラシュートが開くのが見えたから、取り敢えず一安心である。

「良かつた。」

撃墜確実1機だ。

しかし、戦場ではその一瞬が生死を左右する。ハヤテの後ろに一機の飛燕が回りこんでいた。

一方、ハヤテの機動についていけず、距離が開いてしまったワタルがようやくハヤテを再び視界内に捉えたが、そのハヤテの後ろに敵が近づいているのももちろん見えた。

「借金執事！後ろだ！！」

だが、言つより早くハヤテはよけていた。ハヤテは今回が実戦初参加である。通常、そういう搭乗員が敵を撃墜するのは難しい。ましてや、ハヤテのように後ろの敵を素早く察知することなど。だが、彼の今までの人生で養った超人的能力がそれを可能にしていた。そして逆にその飛燕の後ろに回りこむと、先ほどと同じように、鮮やかに撃墜した。

「すげえ！」

ワタルも感嘆の声を上げる。そして辺りを見回すと、敵の姿はどこにも無かった。

「全機集合せよ！――」

隊長機からの集合命令が出たのはその30秒後であった。

空中戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ハヤテを含む硫黄島攻撃隊は、幸い被害もほとんどなく、ほぼ全機が母艦に帰還した。

ワタルは「麗鳳」に着艦すると、すぐにハヤテの所へ向かった。

「綾崎飛曹長……。」

「ワタル君。どうでした？ 戦果はありましたか？」

出撃前と変わらぬ穏やかな表情でハヤテは言った。

「まさか、借金執事の動きについていくだけ精一杯だった。それよりも、借金執事、本当に今日が初めての実戦参加なのか？」

「ええ。」

またもさりとて言つハヤテ。

「信じられないな。あんだけ素早く動けて鮮やかに敵機を撃墜して。まるでベテランパイロットみたいだったぜ。」

ワタルが賞賛の言葉をかける。

「ええ。なんとか、普通に出来ちゃうんですね。今までの経験から。」

（本当に今まで）い人生経験したんだな・・・）

そんなことを考えてしまつワタルであつた。

二人はこの後戦果報告を行い、搭乗員待機所に向かつた。ハヤテの撃墜は、ワタル以外にも目撃者がいたので、晴れて2機撃墜となつた。

20分後、二人が待機所で雑談していると艦内のスピーカーが鳴る。

「敵機動部隊見ユー！」

敵発見の報告である。一人も早速飛行甲板に上がる。

甲板に上がると、出撃割り当てが書かれた黒板を見る。しかし、ハヤテ達の所属する第一中隊の欄には×が書かれていた。

「俺たちは出撃なしか。」

悔しそうで、なおかつほつとしたような表情で言つワタル。

「まあ帰還してから30分ですから、燃料や弾薬の補給が終わっていないのでしょう。」

通常、帰還した戦闘機が次の出撃の為に要する準備時間は1時間から2時間である。弾薬や燃料を補給し、機体に異常がないかチェックしなければならないからだ。

結局ハヤテ達はお留守番で、「麗鳳」から出撃するのは第一中隊と艦攻、艦爆の一部であった。

ハヤテ達もそれら攻撃隊が出撃するのを見送った。

攻撃隊が出撃すると、途端に静かになる。残された者は、先に出撃した者が戦果を上げ無事帰つてくるのをひたすら祈るしかない。

ところが、1時間ほどして意外な報告が入ってきた。

「味方戦艦部隊、航空攻撃を受けつつあり。」

戦艦部隊は「大和」を含む主力艦隊で、機動部隊の西150kmにいるはずである。敵はそちらに襲いかかつたらしい。

しばらぐすると、そちらに被害報告が入ってきた。

「戦艦「アラバマ」、重巡「羽黒」、「コロンバス」沈没、戦艦「マサチュー・セツツ」、重巡「愛宕」大破。他数隻に被害発生。敵機撃墜約60機。」

「畜生……」

「やりやがったな……」

と仲間の隊員たちはいきり立つたが、ハヤテやワタルは至つて冷静だつた。二人にしてみれば、確かに味方が打撃を喰らつたのは不幸ではあるが、内心自分たちが助かつて安心もしていた。

二人は確かに日本を取り返したいとは思つてはいたが、反面死んでまでするという気はなかつた。何があつても生き残るというのが二人の優先事項であり、ハヤテにとつてはナギやマリアとの守るべ

き約束だつた。

さりに2時間ほどして、攻撃隊が帰つてくる時間となつた。

「そついえば、野ノ原さんたちも出撃していたな。」

ハヤテは出迎えに出る事にした。

外に出ると、攻撃隊が着艦を始めていた。雷撃機も次々と帰つてくる。しかし、ハヤテが探す野ノ原の機体は見当たらない。

「おかしいな。」

と、そこで一機の紫電改が着艦した。

尾翼の番号を見ると、「天鳳」の戦闘機である。燃料切れか何かでいちばんに着艦したようだ。

「そついえば、宗谷君は「天鳳」の戦闘機隊つて言つていたな。」

ハヤテはそれを思い出すと、その紫電改のパイロットに近づいた。

「君……」

「はい。なんでしょうか？」

「君は「天鳳」の戦闘機隊だよね？南野宗谷というパイロットしている？」

そう言つた途端、そのパイロットの表情が暗くなる。

そして。

「南野一飛曹は自分の僚機です。 一飛曹は
戦死されました。」

その言葉に、愕然となるハヤテ。

「え！死んだ！？宗谷君が！？」

御意見・御感想お待ちしています。

戦乙女たちの素顔

話はハヤテが宗谷が戦死したという報生を受けた数時間前に遡る。

その時、桂ヒナギクは空母「紅燕」の集会室で、政治集会に参加していた。

「今回の戦いは、悪辣な帝国主義者から、労働者と農民の楽園を守るための聖戦である……」

ソ連軍から派遣された政治将校が壇上に立ち、勇壮な演説を行つてゐる。

ヒナギクたち、集められた将校はそれを聞き流していた。

社会主義国家ではいつした政治教育は良く行われてゐることだ。現に21世紀になつても、某北の国は行つてゐるとされている。

もつとも、ヒナギクを含め本氣で聞く者などいない。彼らの言つていることとやつてこなしがまつたく食い違つてこなことを誰もがわかつてゐるからだ。

社会主義政権になつても、あくまで支配者がそれまでの資本家や華族等に代わつて、政権幹部になつたぐらいである。むしろ悪化していると言つても良い。かつてはそうした支配層に対する文句や陰口をたたくことが出来たが、今そんなことをしたら、「党への反逆は国家への反逆！－」と、反国家罪に問われ、拳句はシベリアで泥炭堀りをやられ、炭堀りをやられれる。

また、正月やひな祭り等の伝統行事も、旧時代の残滓といふ名で全て強制的に廃止された。また国民が精神的に拠り所とした神社や寺も、「宗教はアヘン」という考え方のソ連式社会主義の下で、次々に閉鎖された。

「」ついわけで、国民の政府への反発は高まっていた。それを武力で抑えているのが現状である。

閑話休題。

退屈ともいえる政治集会を終えると、ヒナギクは機銃甲板に出る。空母に積まれる武装は、対外航空機に対してだけの物が多い。「紅燕」も積んでいるのは対空砲と対空機銃だけで、これらは艦の両側に張り出すように設けられたスポンソンという区画に配置される。

その一つに、ヒナギクは向かった。

「紅燕」の対空機銃は全て96式25mm機銃（映画「男たちの大和」で主人公が撃つっていた銃）で、連装（銃身が2本）と単装がある。その内の単装機銃の一基が、補充兵として配備された生徒会3人娘の受け持ちだった。

3人はいずれも徴兵された兵で、一番位が高い泉でも兵長、後の二人に至っては上等兵である。

ヒナギクは3人組と話をしようと思つていた。

ヒナギクが3人組の機銃座に着くと、そこでは3人がせつせと機銃を磨き、油を指しているところであった。革命前には考えられなかつたことだ。

(「これが運命なのかな?」)

ふとそんな事を考えるヒナギク。

3人もヒナギクが立っているのに気付いた。

「「「あ、ヒナ・・・いえ桂少尉殿。」」」

ヒナギクが上官であるため、3人とも敬礼する。その光景に、ヒナギクは苦笑してしまう。

「いいのよ3人とも。今は桂ヒナギクとしてあなたたちと話したいの。」

その言葉に、3人から緊張が消える。

「あなたたち、本当に大丈夫? 実戦経験無いんでしょ?」

ヒナギクは3人に問いただす。

「もちろんない。」

美希が答える。

「けど命令だからな。従わないわけにはいかないだろ?」

「命令違反や上官への反抗なんかしたら、すぐ牢屋に入れられちゃうよ。」

20歳の乙女達がするにはあまりにも物騒で、暗すぎる余話である。

ヒナギクの心を黒い雲が覆つていいく。

しかし、3人組は続けた。

「だが安心しろヒナ。」

「我々は不死身だ。」

「どんなことがあっても死んだりなんかしないよ。だからヒナちゃんが心配しなくても大丈夫だよ。」

それを見て、ヒナギクも多少心配が和らぐ。

「 そ う か も ね 。 け ・ ・ ・ 」

そこから先は言えなかつた。

ジリリ
・
・
・
・
・
・
・

けたたましく非常ベルが鳴り始めた。

「戰鬪配置...」

3人組は急いでヘルメットを付けて、配置に着く。

ヒナギクも走り始めた。

ラッタル（梯子）を上り、飛行甲板に出る。既に艦橋前には他の搭乗員たちが整列を始めていた。ヒナギクもその列に加わった。

全員が集合すると、飛行長の飯田房太少佐が状況説明を始めた。

「先ほど、偵察機が敵艦隊を発見した。と、同時にこちらも敵偵察機の接触を受けた。1、2時間の内に敵機が来襲する可能性が高い。搭乗員は全員機上待機とする。」

機上待機。常に機体に乗つておくといふことだ。

その場はそれで解散となつた。

搭乗員はそれぞれの機体へと向かう。

ヒナギクも自分の機体へと歩いていく。その時、肩を叩かれた。歩であった。

「がんばりましょう。ヒナさん。」

「ええ。」

たつた一言ずつの何気ないやりとり。ヒナギクには予想できなかつた。それが、歩とした最後の直接の会話をなつたことを。

戦乙女たちの素顔（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

失われる息吹

「敵機約200、距離50km…！」

共和日本海軍艦隊旗艦である軽巡「酒匂」の艦橋に敵発見の報が響く。

「200…こちらの戦闘機は40機だけだぞ…！」

艦隊司令官の志摩清英中将はただちに命令を発した。

しかし、日米連合艦隊への攻撃に洗いざらい機体を出したせいでも残されているのは「紅燕」搭載の40機の戦闘機だけである。

「戦闘機を至急発艦せろ…50kmなら20分もしない」
「来るぞ…ひどい戦いになるぞ…！」

「酒匂」からの信号を受けて、「紅燕」は戦闘機の発艦を始めた。
共和日本海軍には力タパルトといふ高尚な物はついていない。

「紅燕」は風力を起こすために、最大船速で風上へと舳先を向けた。
「つしないと発進させられない。

「発艦始め…！」

命令が出され、整備員が一斉に車輪止めを外す。そして、発進始めを表す旗が振られ、1番機から順々に発艦していく。

3番機であるヒナギクは3番田に出ていく。

彼女の番になる。チラッと後ろの歩を見たあと、彼女はスロットルを全開にして発進する。余裕を持って発艦する。

彼女が乗っているのは「疾風改」艦上戦闘機。中島飛行機が政府の命令で、開発中だった「疾風」を急遽艦上機に改修したものだ。40機の疾風は素早く空中に集合し、編隊を組む。40機のうち実に38機が女性パイロットで、その年齢は最高で21、一番若い者は17だ。

若き戦乙女たちの無線に、情報が入る。

「敵機接近中。数約200・」

「200!-!-」

「ひづりの5倍である。戦闘機だけで100機はいるだろ?」

ヒナギクは気を引き締める。

「1)の内の何機が帰れるかしら?」

部隊のパイロットで実戦経験があるのはわずか9名。その内撃墜記録があるのはヒナギクを含めてたったの5名である。

ヒナギクは計器盤に貼り付けた写真を見る。家族全員で撮った写真だ。その家族は今バラバラになってしまった。

（ここで、死ぬわけにはいかない。絶対に生きて帰る……生きてお姉ちゃんたちを助けるのよ……）

改めて決意しなおすヒナギク。だが、その彼女の決意をあざ笑うかのように、前方に敵機の大編隊が見えてきた。

「天鳳」を発艦した、南野宗谷は前方から上昇していく戦闘機をつけた。

「敵機だ！！」

するとすぐに無線に連絡が入る。

「敵機右舷2時方向より数約40！全機戦闘準備！！一機たりとも近づけるな！！」

宗谷は増槽を落とし、機銃の試射を済ませる。異常なし。そして2番機の丸子二飛曹に無線連絡をする。

「丸子！しつかりついてここよ……」

「了解……」

彼らはエンジンを全開にし、敵機へ向けて突撃を開始した。

敵との距離がぐんぐん近づく。そして、敵の姿が鮮明に見えてきた。それに伴い、主翼に描かれている国籍マークも確認できた。

「共和日本軍か・・・」

敵機のマークは白い輪郭付きの赤い星であった。これは共和日本軍のマークである。つまり、田の前に飛んでいる敵は同じ日本人であつた。

「同じ日本人でも容赦はしないぜ！..」

宗谷はハヤテのように、相手が無事なように戦うという考えは毛頭ない。相手は敵だから容赦しないというのが彼の考えだった。

レバして彼は戦闘に入った。

赤い星の「疾風改」と日の丸と星マークの「紫電改」が凄まじいドッグファイトを繰り広げる。しかし、数が圧倒的に劣り、なおかつ練度も低い共和日本軍機が次々と打ち落とされていく。

ヒナギクはその光景を見るたびに心を痛める。落ちていくのは彼女の顔見知りの仲間である。ついさっきまで談笑していた少女たちが次々と空に散っていく。

そんな中で、ヒナギクは戦闘機2機と爆撃機1機を撃墜していた。歩も爆撃機を一機確実に撃墜していた。ただし、いずれも米軍機だった。

だが彼女らがどんなにがんばろうと、数の劣勢は埋めれない。洋上では何隻かの艦艇が燃えているのが見える。

ヒナギクはただ「紅燕」の無事を祈るのみだった。

だが、その心配がの油断を生んだ。後ろから来る敵戦闘機に気付くのが一瞬遅れてしまった。ヒナギクはその影に気付くと、直ぐに無線で歩に向け叫んだ。

「歩、後ろよ！！」

そしてヒナギクは操縦桿を右に倒して回避行動に出る。だが、歩は驚いてしまい回避運動を機敏に取れなかつた。それが命取りになつた。

宗谷は前方の敵戦闘機に見つからぬよう近づいたが、2機の戦闘機のうち1機は素早く避けてしまつた。だが、後ろの機体は動きが緩慢であつた。

宗谷はその機体に狙いを定めた。

「悪く思つなよ……戦争だ……！」

そして照準器の真ん中に入つた敵にまず一連射した。その数秒後、敵機はぐらつて、急降下していった。

「パイロットに当たつたのか？」

宗谷が撃つた相手。それは歩の機体だつた。歩の機体に当たつた銃弾はたつたの一発。しかし、それで充分だつた。

「うー！」

その銃弾はコックピットのガラスを破り、そして歩の心臓を打ち抜いていた。彼女は自分に何が起きたかもわからない内に、その命を落としていた。

歩は事切れ、体は前のめりに倒れた。そして主のコントロールを失つた「疾風改」は重力に引かれ、落ちていった。

「歩ー！ー！ー！」

ヒナギクが叫んだが、それに歩が答えることはなかつた。

失われる息吹（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

生者と死者

「よ、よくも歩をーー！」

ヒナギクの心は怒りで覆われた。自分を誰よりも慕い、最良の友であつた彼女を目の前で殺されたのだから当然である。

エンジンをフルスロットルにして、彼女は突撃した。

一方、歩を撃墜したなどとはまつたく知らない宗谷。空中戦では相手の顔が見えるなどということは滅多にない。だからこそ、相手を人が乗っているとは考えることなく戦えるのだが。

彼の方もヒナギクが突撃していくのが目に入った。

「もう一機が突っ込んでくるな。ようし、返り討ちだーー！」

再び高度を上げ、戦闘体制に入る。こちらは2対1だから負けるはずが無い。しかし、アクシデントが起こった。

「こちら丸子。エンジン不調ー！」

僚機から無線が入る。

「丸子！俺一人で充分だ！お前は戦線を離脱しろー！」

「了解！御武運をーー！」

丸子兵曹の離脱によつて1対1となつてしまつたが、それでも宗

谷は負ける気がしなかつた。

彼の乗る「紫電改」戦闘機はアメリカ名を「F7Dサンダーキャット」と言い、制式採用から半年しか経過していない新型機である。速度も速く、また旋回性能を高める秘密兵器、自動空戦フラップを装備していた。

対するヒナギク「疾風改」は登場から既に1年半経過しており、旧式化しつつあった。速度等全ての面で最新鋭の「紫電改」には劣っている。2機はドッグファイトに入った。

最初に発砲したのはヒナギクである。

機銃の曳光弾（目標に当たっているか確かめるために使われる光を発する弾。当たっても効果は無い）が空中に赤い線を作り走つていぐ。

しかしこの時はお互い正面を向いての反航戦となつたため、命中弾は出なかつた。

宗谷は素早く切り返すと、ヒナギクの後ろを取ろうとする。

「やうやいかないわーー！」

もちろん、ヒナギクも後ろを取らせないために必死に回避する。中々射撃する余裕を与えないヒナギクの動きに、宗谷は舌を巻く。

「こいつ。上手いーー！」

だが、スピードに差があるために、徐々に距離が詰まつてきた。

空中で急旋回や急上昇等を続けると、凄まじいG（重力加速度）が人間に襲い掛かる。ヒナギクはそれに歯を食いしばって絶える。

体内の血液が一気に逆流するようにも感じられる。

だが、この体力勝負に、ヒナギクは打ち勝てなかつた。いや、厳密にはヒナギクではなく機体が打ち勝てなかつたのだ。無理な操作を加えてしまつたようだ。機体が悲鳴を上げていた。下手をすれば空中分解となつてしまつ。

彼女は動きを少し緩めた。宗谷はその瞬間を見逃さなかつた。

「よし、今だ！！」

宗谷は発射ボタンを押そうとした。距離はもう20m程度しかないだろ。絶対に当たる距離だ。ところが、ここで彼の目に信じられない物が飛び込んできた。

「え！？」

ヒナギクが一瞬顔を後ろに向けたのだ。

「女が戦闘機のコックピットに……」

噂では聞いていたが、まさかという方が強かつた。彼は発砲を躊躇した。戦場での生死は一瞬で決まる。この時もそうなつた。

ヒナギクも宗谷の動きが鈍くなつたのを見逃さなかつた。彼女は

その隙に逆に宗谷の後ろに回つてんだ。

「しまつた！！」

宗谷も慌てて回避に移つたが、もはや手遅れだった。

「歩の仇！」

ヒナギクは憎しみと怒りを込め、発射ボタンを押した。銃弾は狙いたがわざ宗谷機を貫いた。

「まずい！燃料タンク・・・」

彼はそれ以上言えなかつた。次の瞬間燃料が大爆発を起こし、彼の「紫電改」は空中を彩る火の玉になつていたからだ。

彼もまた、歩と同じく一瞬の内に、その若い命を空に散らしたのであつた。空に現れた光の球と、機体の破片が落ちて行くさいに発生した黒煙が、まるで彼の墓標のようであつた。それもすぐに消える。

ひつしてヒナギクは歩の仇を討つ形となつた。

「歩。仇は討つたからね。」

彼女は宗谷機の爆発を見ながらそう呟く。だが彼女の胸に、仇を取つたという高揚感は全く無かつた。

そして、辺りを見回すと、既に敵機の姿はなかつた。銃弾も燃料ももうない。彼女は母艦へと帰還する。親友を失つた悲しみと共に。

「うわーん！！」

彼女は心の底から泣いた。例え歩の仇を討つても、ただ一機の敵機を撃墜した事にしかならない。それで彼女が生き返り、再びあの笑顔が戻ってくるわけではない。

そして、それが現実という過酷な事実であった。

生者と死者（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

再び戦空へ

ハヤテの心は重かつた。

友人の宗谷に続いて、野ノ原達の未帰還の報告も聞いたからである。

野ノ原に氷室、虎鉄の3人は同じ雷撃機に乗っていたのだが、ついに彼らは帰つてこなかつた。

ハヤテが雷撃隊の搭乗員に聞いた所、「野ノ原兵曹たちの機体は、敵高角砲の直撃弾を受けて墜落しました。」という返事が返つてきた。

今日だけで4人の知人が命を落としていた。もし彼が、さらに歩が宗谷に打ち落とされたことを、そしてその宗谷をヒナギクが打ち落としたということを知ることとなれば、さらなる重圧が掛かることとなるだろう。

だが、戦争は感傷に浸ることを許はしなかつた。

「戦闘機搭乗員整列！」

スピーカーから命令が流れる。

ハヤテは、気は進まないが、急いで甲板に上がつた。

甲板に上がって整列すると、飛行長が喋り始めた。

「諸君。予定では我が「麗鳳」戦闘機隊は艦隊掩護を行う予定だつた。しかし、敵艦隊への第一波攻撃隊の被害が予想以上に大きかつたため、我々が第一波攻撃隊の護衛任務を行うこととなつた。朝の攻撃で多少疲れているかもしれないが、がんばってくれ。出撃予定時刻は1200（ひとつまるまるまる）」

ハヤテは腕時計を見た。11時を針は指していた。

（1時間後か・・・・）

そんなことを考えるが、飛行長の訓示は続く。

「なお。敵艦隊には今回多数の共和日本艦艇も混じつている。同じ日本人同士の戦いになるであろうが、諸君容赦せず戦つて欲しい。例え今、諸君が人でなくなるような行為をとることとなつても、私は敢えて言おう。勝て。・・・・・以上だ。出撃に備えよ！！」

その場はそれで解散となり、ハヤテは艦内に入る。その彼に、ワタルが声をかける。

「借金執事。」

「なんですワタル君？」

「お前は・・・・・・・・・・勝つためなら人でなくなつても良いと思うか？」

どうやら今の訓示の内容を気にしているようだ。

「僕は・・・・・・・・出切る事なら人でありたいです。けど・・・

・・・・・ 戦争はそれを許してくれるでしょうか?」

ハヤテは考える。これ以上目の前で知人が死ぬことがあった時、理性で感情を抑えられるのかと。

ハヤテはワタルを見る。

「なんだよ借金執事?」

ハヤテはワタルに静かに言った。

「ワタル君。・・・・・ 絶対死んではいけませんよ。どんなことがあつても、生き残つてください。」

「え!?」

驚くワタルを尻目に、ハヤテは歩いていってしまった。

「借金執事・・・・・」

一方、今やハヤテの敵であるヒナギクの方はずつと心が重かった。

歩を失つた悲しみに加えて、今回出撃した40機の戦闘機の内帰つてきたのは25機だけであった。実に4割近い機体が帰つてこなかつた。そして帰つてきたうちの6機は使い物にならないほどの損傷を受けていた。

日米連合軍の第一波攻撃隊は、ソ連海軍の軽空母「エニセイ」、

イーリー」「ボルガ」「オネガ」と、日本海軍の「祥鳳」「千歳」を撃沈した。護衛艦も多数沈められてしまつた。

残存する空母は大型空母の「ベーリング」に軽空母の「瑞鳳」、「千代田」、そして「紅燕」だけである。それらが積む航空機で使える機体は100機を割つていて、おまけに戦闘機はその半分程度しかなかつた。

敵戦艦部隊に大打撃を与えたが、敵空母のほとんど健在であるようなので、再び敵の大編隊がやつてくるのも時間の問題だつた。

ヒナギクは再び飛ばなければならない運命にあつた。しかも、先任搭乗員が全員戦死または負傷したため、ヒナギクが隊長代理を務めねばならなかつた。

ヒナギクは18名の搭乗員の前で命令を伝えなければいけなかつた。

「敵が再び来襲するのは必死。だから皆には苦しいだろうけど、がんばつてもらわなくちゃいけない。…………恐らく、戦闘が終わるころに母艦は傷ついているわ。燃料に余裕があるのなら、小笠原の陸上基地に、燃料が無ければ近くの味方艦艇のそばに着水してね。」

ヒナギクは一端そこで言葉を切る。

(本当にこの娘たちを送り出さなければいけないの？一番若い隊員は17歳なのよ。夢も希望もあるのに。私はこの娘たちに、それを奪つて、地獄への切符を渡せつていつの？)

ヒナギクの脳裏に歩の笑顔が浮かぶ。その想いを振り切ってでも、
彼女は命令をしなければいけなかつた。拒否権など有りはしないの
だ。彼女には「こういうのが精一杯であつた。

「みんな！必ず生き抜いてね！…自分の為に…！」

再び戦空へ（後書き）

御意見・御評価・御批判お待ちしています。

最悪の再会

1200。計画通り、ハヤテ達の戦闘機隊は出撃した。

日米の空母から飛び立つたのは戦爆連合（戦闘機と攻撃機の混合部隊）計180機。分解された状態で搭載されていた予備機まで組み立て、洗いざらいの機体を出撃させていた。

敵の残存空母は戦闘開始時の半分以下だから、これでも過剰な数かもしぬれない。

しかし油断は禁物だった。既に4人の知人が命を落としている。次に自分の番がこないとは決して言えないのだ。

特に、宗谷を打ち落とした機体は、数での劣勢を跳ね除けて、数機の味方機を打ち落としていたという。

「ヒナギクの描かれた機体か・・・・・」

宗谷の部下が言つた、宗谷を撃墜した機体。ヒナギクと聞いたとき、ハヤテには悪い予感が走つた。

もしかして、その機体のパイロットは桂ヒナギクではないかと。有り得ないことではない、共和日本軍は女子パイロットまで前線に出していると聞いている。可能性は零ではない。もし、その「疾風改」と出会つたら、そうするのか。

彼に残されている時間はあまり多くは無かつた。そして、悪い予感とは当たつてしまう物なのであつた。

「うそ……」

19機の戦闘機部隊の隊長に任命されたヒナギクは息を飲んだ。目の前に現れた敵の編隊は200近く。先ほどの攻撃隊とほぼ同規模の編隊だった。

一方、共和国海軍を守る戦闘機は、帰還した攻撃部隊から引っこ抜いた分も含めて56機しかなかつた。これでは勝敗は目に見えている。

しかし、どんな絶望的な状況であつても、ヒナギクに逃げられることは許されない。

「ひから桂。敵はひから桂の数倍の数だけど、なんとかがんばって。小隊を絶対に崩さず戦つよつこ。いい？」

「……了解……」

ヒナギクの命令に対し、18人の部下から返答が帰ってくる。

小隊を崩さずとこひのせ、2機ペアで戦えとこひことだ。

戦闘機の空中戦を考えると、どうしても1対1の華々しい戦いを思い浮かべるが、実際この時期の戦闘でそのような状況が起こりえるのは稀であった。

複数の戦闘機で隊を組み、相手を襲うのは当初ドイツ空軍が採用し、大きな戦果を上げ、全世界に普及した。

2機で襲うなんて卑怯と思いがちだが、戦争に卑怯も綺麗もないのが現実であった。

「全機増槽投下！！」

総隊長である若本徹三大尉の命令が届く。反射的にヒナギクは増槽投下のレバーを引いた。

軽い衝撃と共に、翼の下に装備された2個の増槽が落ちる。

その時、敵の編隊の一部がこちらに翼を翻すのが見えた。攻撃機に手出しさせないために、先制攻撃を行う気のようだ。

「簡単にはやられないわよ！！」

ヒナギクはスロットルを全開にして、エンジンの出力をフルパワーに上げる。

敵機が撃つてくるのが見えた。それを微妙な舵の扱いで避けながら、ヒナギクはその内の1機を照準器に捉えた。白い星マークを付けたアメリカ海軍の戦闘機だ。

絶好の位置に着いたとき、ヒナギクは無言で発射ボタンを押す。

真正面からマトモに20mm弾を喰らったそのシーキャット（紫電改のアメリカ軍用）は次の瞬間には爆発炎上し、盛大に炎の尾を引いて落ちていった。

ヒナギクにとつてこの日6機目、通算10機目の戦果である。ちなみに、エースのというのは第一次大戦時にフランス空軍が定めた、敵機5機以上のパイロットに与える称号とされている。

もつとも、そんな事今の彼女には関係なかった。何せ食つか食われるのかの戦闘中であり、敵機の方が圧倒的に多いという危機的な状況なのだ。

敵味方入り乱れての大空中戦が展開されているが、味方の方が圧倒的に不利だつた。数で押し切られ、敵機に後ろを取られ、火を噴いて落ちていくのは、やはり味方の「疾風改」の方が多い。

ヒナギクが上方に目をやると、今まさに味方機を襲つている「紫電改」の姿が視界に入ってきた。

「これ以上やらせはしないわ！！」

ヒナギクは真下から上昇する形で、その機に照準を合わせた。

ハヤテは2機編隊で飛んでいた「疾風改」の内1機を撃墜した後、ワタルがもう一機を撃墜している間の掩護を行つ。あたりの空に目を凝らす。

すると、ワタルの下から一機の「疾風改」が突き上げる形で近づくのが見えた。

「ワタル君！下から来てる！！」

返答はなかつたが、ワタルは避け、その敵機の攻撃は空振りに終わつた。そしてハヤテがその「疾風改」の後ろを取るために上昇した。上昇力では「紫電改」が有利の為に、すぐに距離は縮まる。

そして、その敵機に近づいてハヤテは驚いた。機体側面にヒナギクの花が描かれていた。

「まさか！！」

先ほどの悪い予感が脳裏をよぎる。そして、その「疾風改」が旋回した瞬間、操縦席の人物の顔が見えた。

「ひ、ヒナギクさん。」

一方、ヒナギクの方からもハヤテの顔が見えた。

「は、ハヤテ君。」

最悪の再会（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

散りゆく命

上空で激しい空中戦が行われていること、共和日本とソ連の合同艦隊が攻撃を受けていた。

戦闘機の妨害をはねのけた爆撃機や雷撃機が海上を逃げ回る艦艇に襲い掛かった。

帝国海軍の機体は、同士討ちを嫌つてソ連海軍の艦艇に狙いを絞つたが、アメリカ海軍機は共和日本海軍の艦艇に容赦なく攻撃をかける。

ヒナギクの母艦であり、泉達が乗り組む「紅燕」もその中に入っていた。

泉、美希、そして理沙の3人は対空機銃の受け持ちである。彼女らはまさに戦闘の真っ最中であった。

「方位右30度、仰角45度！！」

レシーバーを頭につけた泉が叫ぶ。

3人の中でも最上位の彼女は、対空指揮所（敵のスピードから最適な方位角と旋回角を計算する部署）から出るデータを伝える役目である。もちろん、あたりは他の機関銃や対空砲の発射音で凄まじいほどうるさいから、大声で叫ぶのだ。

「右30度、仰角45度！！」

射撃手の理沙が復唱し、手元にあるハンドルを回して機銃を動かし、銃身を言われた位置につけると、足元の発射ペダルを踏む。

天を切り裂くように、銃弾が発射される。そして、弾がなくなれば、装填手の美希が15発入りの弾倉を付け替える。

既に床は空薬きょうと、打ち尽くした弾倉で一杯だ。

発射する際には銃身の先から凄まじい発射炎と硝煙が出るので、3人の顔はその煤で真っ黒になっている。

だが、彼女たちがいくら撃つても、敵機が炎を引いて落ちていく光景は稀にしか見受けられない。他の機銃座も同様である。

もともとアメリカ軍機は頑丈なつくりであるから1・2発当たつた所では答えない。加えて共和日本海軍の計算機が旧式であるために、正確に敵を追尾できていないのだ。

ただ、艦艇も水上を蛇行したり、高速で走つたりして航空機の狙いをそらし、簡単には被弾しないようにしている。

「紅燕」も何発かの魚雷や爆弾を回避していた。しかし、敵も馬鹿ではないから、直ぐに有効な手段へと攻撃方法を変える。

「敵機直上急降下5！左舷に敵雷撃機3！」

泉のレシーバーに声が入る。

彼女が上を見ると、確かにゴマ粒のような敵機が急降下してくる。さらに、海面に目をやると、這うように雷撃機が突っ込んでくるの

が見えた。いつなると、どちらか一方を避けても絶対に当たる。

泉だけでなく、理沙と美希にもそれはわかった。

「泉、指示を……」

「ちょ、ちょっと待つて……」

泉はレシーバーに集中する。しかし、いつこうに指示が入つてこない。どうやら指揮所も同時に突つ込んでくる多数の敵機に狙いを決めかねていいようだ。

これでは埒があかない。

「だめ、指示がこない……」

「仕方ない、理沙、とにかく撃て……」

「了解!」

美希に言われ、理沙が発砲した。しかし、狙いもろくにつけていない様な銃弾が当たるはずが無い。敵に一発も当たらないまま、弾切れになつた。

すぐに美希が弾倉を交換し、理沙は再びペダルを踏んだ。しかし、何故か弾は出ない。

「な、なんで……」

急いで3人が銃を見てみると、その理由がわかった。銃身がジユ

一といつ音を立てて溶けている。連続した発砲で、加熱してしまったようだ。

「銃身が溶けて、弾が詰まつたんだ！！」

美希が言つ。これでは銃身を交換しない限りもう撃てない。

そういうしてこらうちに、まず雷撃機が魚雷を投下するのが見えた。

「　　あ！　！」

さりに急降下してくる爆撃機の音も大きくなる。そして、その爆撃機の胴体から黒い物体が投下されるのが見えた。もちろん、投下されたのは爆弾だ。

通常、投下された爆弾が丸いままだつたら自分の所に当たり、細長く見えたたら外れる。そして、落ちてくる爆弾は丸いままだつた。

「当たるだーー！」

理沙が叫んだ。

「伏せるんだ理沙！ 泉。」

美希が言い、理沙が頭を下げる。しかし、泉は立つたままだつた。恐怖のあまり、放心状態になってしまったようだつた。

「泉！ 伏せるんだーー！」

もう一度叫ぶが、それでも泉は我を取り戻さない。仕方なく、美希が覆い被さる形で、彼女を押し倒した。

「うわーー！」

泉はその時になつて、ようやく我を取り戻したが、彼女が押し倒された瞬間に、3発の1000ポンド爆弾が「紅燕」に命中し、炸裂した。

さりに、2本の魚雷も命中し、彼女たちを震度7クラスの地震と同じ程度の揺れが襲い掛かつた。

「紅燕」は軽空母だから、装甲等という物はない。爆弾は易々と甲板を貫き、格納庫内で炸裂した。

既に飛行機はない空の状態だったが、一発が航空機ガソリンタンクに直撃したため、大爆発を起こした。さらに、魚雷はいずれも機関室に命中し、凄まじい量の浸水が起こり、多くの作業中の兵士が飲み込まれた。

機関室による浸水は船にとつて致命的な損害となる。発電機が止まり、消化設備も動かないからだ。長くはもたないと艦長は見たのか、早々と総員退艦命令が出た。

「総員最上甲板！！」（総員退艦と同じ意味の命令。）

命令を兵士が走りながら伝える。その声は泉の耳にも入ってきた。

「美希ちゃん、退艦だつて。早く逃げよ。」

ところが、美希から帰ってきたのは予想外の答えだった。

「『めん泉、それは出来そうにないわ。』

「え……」

泉は美希の下から抜け出し、彼女の体を見てみる。そして、息を飲んだ。彼女の背中には、深々と爆弾の破片が突き刺さっていたからだ。

「理沙ちゃん。大変！ 美希ちゃんが……」

だが、それに対する返答はない。泉は恐る恐る理沙のいた方を見た。

理沙は、座った姿勢のまま、絶命していた。

散りゆく命（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

別れ

「そんな・・・・・・理沙ちゃん・・・・・・」

ついでに今まで、田の前で一緒に話して、戦っていた仲間は、わずか一瞬の間にその若き命を奪い取られ、物言わぬ屍になっていた。

「理沙も・・・・・やられたの？」

美希が泉の声を聞いて言った。その息遣いは段々と荒くなっている。そして、彼女は何か覚悟を決めたように話し始めた。

「泉・・・・・あなただけでも生きて・・・・。」

「えー?」

親友の口から出た驚きの言葉。

「私は・・・・・もうダメよ・・・・・。」

「何言つてゐる美希ひやんーー。」

泉は彼女に、そして自分に美希はまだ助かると言い聞かせるつもりで言った。理沙に続いて美希まで田の前で失うなんて、彼女にとっては考えたくもないことだった。

しかし、美希の声は話すたびに弱々しくなっている。徐々に泉の心に不安が広がっていく。

「私…………泉や理沙と…………会えて本当に……良かつた。…………楽しかった。ずっと3人…………親友でいたかつた。ヒナや…………ハヤ太君や…………みんなと一緒にまた昔みたいに…………仲良く…………話したかつた…………。」

「美希ちゃん！……もうやめて！……そんなこと言わないで！……」

「泉…………いじめてばかりでごめんね…………私と…………理沙の分も生きて…………幸せになつて…………私達の未来…………を…………頼む…………わ…………」

それが彼女の言つた最後の言葉。最後は途切れ途切れになり、そして最後まで言い切れないままに、彼女は事切れた。

「美希ちゃん！……美希ちゃん！……」

泉は何度も彼女も揺さぶつてみる。だが、もはや彼女が目を覚ますことは永遠になかった。

「ウワアアアアンンン！……！」

泉は泣き叫んだ。

わずか数分のうちに、生涯の親友を2人も失つてしまつた。その悲しみは若く純粋な彼女にとつてあまりにも大きな物であった。

（なんで？なんで二人とも死ななくちゃいけないの？なんで？）

親友の亡骸を抱きしめながら、泉は自問自答していた。

そんな彼女の所へ、一人の人間が走ってきた。

「瀬川さんたち、大丈夫ですか？」

泉もその声に気付いた。

「サキさん？」

走ってきたのは、泉達と同じく、機銃座配備の補充兵として乗艦していた貴島サキと春風千桜だった。一人は泉達の一つ隣の機銃座を担当していた。その二人が、退艦命令が出たので、3人が心配になつて来てくれた様だ。

「瀬川さん。良かつた……」

最初は安堵の声がでたが、彼女らも美希と理沙の死に気付いた。

「「そんな・・・・・・・・」」

「美希ちゃんは・・・・・私をかばつて・・・・・あれ、そういうば
愛歌ちゃんは？」

泉は霞愛歌がいないことに気付いた。確かサキたちと一緒に機銃に配置されていたはずである。

愛歌という名前を出した途端、サキと千桜の表情が曇り、その顔は俯く。

泉には何が起きたか予想できた。

「そんな・・・・・愛歌ちゃんも・・・・・」

「ええ・・・・・けど、泉さんが無事でよかつた。や、退艦しま
しょひ。」

千桜が言った。しかし、心をすたずたにされた泉はとんでもない
事を言い始めた。

「私は・・・・・理沙ちゃんや美希ちゃんを置いて逃げるなんて出来
ない。」

「「泉さんーー。」」

一人は困った。艦の傾斜は段々と酷くなっている。そして、火災
も延焼を続けている。後少したてば海上に燃料の重油が漏れ出すだ
ろう。そうなる前に脱出しなければいけない。悠長に彼女を説得し
てこる暇なんてもうなかつた。

「「ひなつたら。千桜さんー。」」

「はーーー。」

田配せをして、一人は强行手段に出た。

サキは泉の両手を、千春は両足を掴んだ。

「えーーーーー。」

泉は不意をつかれる形となつた。

「「せーの一でーー！」

サキと千桜は泉の体を大きく振る。そしてそのまま彼女を海へ目掛けて放り投げた。

何が起きたかわからぬ内に、泉は海に落とされていた。幸い、救命胴衣をつけていたから体はすぐに浮き上がった。

泉が浮き上がったのを待つように、残った二人も海に飛び込んだ。そして、艦から全力で離れるために、泳ぎだした。そうしないと重油に巻かれ、最悪の場合沈没の渦に巻き込まれる。一人はひたすら泳ぐ。もちろん、その途中で放心状態になっていた泉を引っ張つて。

別れ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

悲壯なる決断

海上で共和日本やソ連の艦隊が打撃を受けていたころ、空中戦も佳境に入っていた。

その中で、ハヤテとヒナギクは出合ってしまった。

（そんな・・・・ヒナギクさんが共和日本のパイロットに、しかも宗谷君を撃墜した張本人だなんて。）

（ハヤテ君が乗つてた・・・・どうすればいいの？）

二人ともどうすればいいのか迷つた。しかし、戦場では一瞬の判断が生死を決める。二人にあつた時間はあまりにも短かつた。

「仕方がない。ワタル君。この敵機は無視。別の目標に向かいります。」

「えー!? なんでそんなことするんだ!?!？」

敵前逃亡に匹敵する命令に、最初ワタルは混乱した。

「あの機にはヒナギクさんが乗つっていました。僕には攻撃できません。」

「生徒会長が・・・・了解！」

ワタルも納得し、二人とも離脱にかかりた。ちょうど、少し先の空域では空中戦が続いていたので、それに加勢する事にした。

一方で、ヒナギクもハヤテ達が離脱をはかり、別の味方と戦う気なのがわかつた。

(ハヤテ君は私との戦いを避ける気ね・・・・・けど・・・・)

彼が自分との戦いを避ければ、自分は生き残れるだらう。だが、彼が仲間を撃墜しないという保障はどこにもないのだ。

ヒナギクは心を鬼にした。

「あなたを野放しにするわけにはいかない！！」

ヒナギクはハヤテ達に向け突撃を開始した。

それにワタルが気付いた。

「ハヤテ！生徒会長が突っ込んでくるぞ！！」

「くーーー！」

(どうして？もしかして向こうからは見えなかつたのか？いや、目が合つたはずだ。・・・・ならどうして？)

そんな疑問が心の中を渦巻くが、時間はもつない。ハヤテは決断した。

「ワタル君、先に行つて下さい。彼女は僕が引き受けます！－！」

「え！ハヤテ！－！」

ワタルの言葉も聞かず、ハヤテは機体を翻した。

それはヒナギクにももちろん見えた。

「やる気ね・・・・・ハヤテ君。」

二人はお互に正面から向かい合つ形となつた。

「あなたと戦いたくなかった。・・・・・けど、僕もここでやられるわけにはいかないんだ！！」

ハヤテはちらりと計器盤に張つたナギの写真を見た後、全神経をヒナギクの機体に集中した。

そしてまず、ヒナギクが発砲した。

ハヤテは機体を滑らせて、それを交わそうとした。幸い集中的な被弾はなかつたが、一回だけガンという鈍い衝撃があつた。だが、エンジンも機体も正常のままだから、致命的な被害ではなかつたようだ。

そして一人がすれ違つ。再び目が合つた。それも一瞬のことでのお互には相対速度1000km以上でのすれ違つた。

その数秒後、ハヤテは大技に打つて出た。

「今だ！！」

ペダルと操縦桿、さらにはフラップを操作し、機体は急旋回に入

つ
た。

۱۰۰

すさまじいGが彼を襲つた。だが、それに見合うだけの大技である。旋回が終わつたときには、彼はヒナギクの真後ろにいた。

ヒナギクは信じられなかつた

「うそ！ どうしてあんな動きができるの！？」

ハヤテが行つたのはインメルマンターントと呼ばれる技で、第一次大戦中、ドイツの撃墜王インメルマンが作つたといわれていることから、この名が付いている。

舵を上手く使って、驚くほど小さな半径での旋回を行う技でも
ちろんそういう出来る物ではない。

一方ヒナギクの方は自分が絶望的な状況に置かれているのに気付いた。ハヤテとの距離は50m程しかない。必中距離である。

直ぐに蛇行して回避運動を始めた。

だが、ハヤテはピタリと後ろに付いて離れない。

「ダメだ！！」

ヒナギクは覚悟を決めた。しかし、ハヤテは機銃を撃とうとはしなかつた。

「なんで撃つてこないの？」

さつきから絶好の射点にいるにも関わらず、いつひとつに撃つてこない。

（今無闇に撃てば確實にヒナギクさん自身に当たる。

それだけは避けたかつた。

いくら敵でも、ハヤテには人を殺すことなど出来なかつた。

とにかく彼は待つた。絶好のタイミングとなるその一瞬を。

そして1分後、ついにそれは訪れた。

わずかだがヒナギクの運動が鈍つた。

- ۲۹ -

彼は機関銃の発射モードを2挺だけにして、発射ボタンを押した。

• T_s T_e T_b

機関銃弾が空を切り裂き走つていった。

悲壮なる決断（後書き）

評価をお待ちしております。

ハヤテが狙つたのは補助翼だった。

主翼の外側に付いていて、面積的には小さな部品であるが、これが破壊されると飛行機は錐揉み状態になる。

もちろん、それゆえに狙つのは難しい。だからハヤテは撃つタイミングを計つていたのだ。

そして銃弾は見事補助翼に命中した。

着弾の衝撃は一回だけだつた。しかし、補助翼が破壊されたことにより、ヒナギクの「疾風改」は錐揉み状態になってしまった。

「わーわあー！」

突然の事態にヒナギクは混乱する。

一方、撃つたハヤテは必死の思い出叫んでいた。

「脱出するんだヒナギクさん！！」

補助翼が破壊され錐揉み状態になった場合、ベテランパイロットはフランプを上手く使って機体を立て直せる。しかし、あいにくと戦闘経験はあるが、飛行時間自体は短いヒナギクには、そこまで器用なマネは出来なかつた。

それでも彼女は操縦桿やペダルを巧みに操つて一時的に機体の落

下速度と錐揉みを抑える事に成功した。

その瞬間を逃さず、彼女はキャノピーを開き、血の体を空中に飛び出させる。

ハヤテはヒナギクが脱出した時、息をのんだ。しかし、数秒後にはヒナギクの落下傘は開き、白い花を空中に咲かせるのを見て安堵の息を吐いた。

「よ、良かった。」

ヒナギクを殺さずに済んだことで、緊張が一気に解けた。後は彼女の無事を祈るのみだ。

だが、一難をつづけた一難。ハヤテは計器盤を見て田を見開いた。

「ヤバイ！」

ちょうどその時、ワタルが敵を片付けたのかやつてきた。

「ハヤテ！ 帰還命令が出てるぞ！ ！」

しかし、ハヤテにはそれどころではなかった。

「ワタル君。こっちも帰りたいのはやまやまなんですが。オイルが漏れてい、とても帰れそうにありません。」

「何！？」

どうやら一発だけ当たったヒナギクの銃弾がオイルパイプを傷つ

けたようだ。

オイルがなくなると、エンジンが焼きつく。イコールプロペラが止まる。

既にオイル計の針は〇を指そうとしていた。

「仕方ない。ワタル君は母艦に戻つてください。僕は不時着して救助を待ちます。確か潜水艦が展開しているはずですから。」

このままで墜落を待つだけなので、ハヤテは不時着水を決めた。

「了解！ハヤテ、気をつけてな。」

「そつちも。」

そうして、ワタルは一人先に帰還していった。

一人きりになつたハヤテは不時着水するために高度を落とす。もちろん、高速で海面に突つ込んだらバラバラになるので、速度も落とす。

そして、いよいよオイルがなくなつたのか、エンジンが異常な音を発し始めた。

ハヤテはそれでも冷静沈着に機体を操る。

数十秒後、海面が目の前に迫つた。

機体の速度は失速ギリギリまで落ちていた。海面に機体が着水す

ると、さらに機体のスピードは急減速した。と同時にショックがハヤテを襲った。幸い、ショックにあらかじめ備えていたので、怪我などはせずに済んだ。

機体が停止するとハヤテは素早く脱出準備に入った。

通常、海上で使う機体は不時着水に備えて翼に水密区画と zwar、浮力を保つための空間を設けている。これによつて、最低2分は浮いていられる。

ハヤテはまず計器盤に張つていたナギたちとの写真を懐に入れ、続いて座席下に裝備されていた緊急用筏を出し、それを海に投げ込む。

筏は水に入ると直ぐに自動的に膨らんだ。ハヤテは素早くそれに乗り移つた。

その時には機体は既に沈み始めていた。

ハヤテは一瞬、ブクブクと沈んでいく機体をチラッと見たが、しかしすぐに頭を切り替え次の事を考えなければいけなかつた。

彼の今置かれている状況は、太平洋の大平原に一人ぼっちという、いわば遭難者に近い物だつた。筏に備えられているのは水分補充用の飴ぐらいで、もし長時間の漂流となつたら苦しい。

既に時刻は夕方で、日は水平線上に沈もうとしていた。

「助け来るかな？」

夜間になると、海面上は闇に包まれ、空と海面の区別さえつかないこともある。そんな中で、人間が見つけられる確立はかなり低い。

さすがのハヤテにも恐怖感が芽生える。

しかし、それは杞憂で終わった。

3時間後、少し先の海上に明かりが見えた。間違いなくサーチライトの光だ。

ハヤテは拳銃を取り出すと、空中に向けて2発ほど撃つた。

「だめかな？」

もう一度撃とつとした時、サーチライトがこちらの方を向いた。そして、そのライトは徐々に大きくなり、数分後にはそのライトを照らしているのが潜水艦であることまでわかった。

「た、助かったー！」

ほんの数時間だけではあつたが、死の恐怖から脱出できたハヤテであった。

生き残つた者

「これに掴まれ！！」

潜水艦からロープに結わえられた浮き輪が投げられる。ハヤテはそれにしがみ付いた。そして潜水艦の上に引き上げられた。

「毛布です。どうぞ。」

水兵が毛布を手渡してきた。その制帽を見てハヤテは安堵した。桜と錨のマーク。帝国海軍であったからだ。もし共和日本海軍に助けられれば、裏切り者としてどんな事をされるかわかつたものではなかつたが、とりあえず一安心である。

ハヤテが毛布に包まると、一人の男が声をかけてきた。

「ようこそ。本艦は帝国海軍潜水艦SS707だ。」

ハヤテは直ぐに敬礼する。相手が少佐の階級章を付けていたからだ。

「空母「麗鳳」戦闘機隊の綾崎ハヤテ飛曹長です。」

「艦長の速水だ。助けられたのは君で4人目だ。君は運が良いよ、後30分で捜索を打ち切る予定だつたからな。」

4人目と聞いて、ハヤテは少し嬉しくなつた。自分以外にも助かつた人間がいたからだ。

「まあとにかく、中へ入つて一端着替えたまえ。」

ハヤテは進められるままに艦内へと入つた。

「ひづりぐりうわ。」

そして、水兵に案内されていた途中ある部屋の前まで来た所で、ハヤテに声が掛けられた。

「あ、綾崎君…。」

ハヤテはその瞬間信じられない思いだつた。潜水艦の中で、女性の声がするなんて。しかも、その声に聞き覚えがあつた。

「え…！」

ハヤテが振り向くと、その部屋に2人の女性がいた。3年ほど会つていなかつた、見間違つはずはなかつた。

「サキさん…それに千桜さん…ぐりうして…？」

信じられなかつた。まさかこんな所で出会つなんて。

「私たちは徵兵されて、空母に機銃手として乗つていたんです。けど、沈められてしまつて。それで脱出して漂流してたらこの潜水艦に拾われたんです。けど、瀬川さんが…‥‥」

サキがちらつと視線をずらす。

ハヤテは寝台に寝かされている人物に気付いた。

見間違えるはずもない、瀬川泉だ。だが、ハヤテは田を見開いた。

彼女の田は死んでいた。まるで魂が抜けてしまつてゐるよつだ。

「せ、瀬川さん！一体何があつたんですか？」

「花菱さんと朝風さんが田の前で戦死して。それが心に計り知れない傷を『えてしまつた』ようです。」

千桜が言つ。

「そんな・・・花菱さんと朝風さんが・・・確かに一人がそんなことになれば・・・」

「人が死んでしまつたことは信じられなかつたが、確かに泉が今この状態になつてしまつたことも頷ける。」

「綾崎君。あなたから声を掛けてみて。私たちや軍医が声を掛けてもうわ言を言うばかりで。あなたの声を聞けば、懐かしさから氣を取り戻すかもしないから。」

ハヤテは言われたとおりにしてみる。

「瀬川さん。わかりますか？ハヤテです。綾崎ハヤテです。」

しかし、泉に反応はない。ハヤテは同じ言葉をもう2回掛けてみる。

すると、3回田でようやく泉が反応した。

「…………ハ…………ハヤ太君？」

懐かしい言葉だった。

「そうです。」

泉の田に、わずかばかりであるが、生気が戻ったように見えた。しかし。

「ハヤ太君。美希ちゃんが…………理沙チンが…………」

相当傷は深いようだ。これでは埒が開かない。そこでハヤテは自分を悪役にしてみる事にした。

「けど、一人が死んで少しは良かつたんじゃないですか？あなたをいじめてばかりでしたし。」

「「え！？？」

その言葉に、サキと千桜は驚く。そりやそうだ。明らかに死者を冒涙している。

「どうせあの一人のことです。あの後も…………」

ハヤテはそれ以上は言えなかつた。正気を取り戻した泉が起き上がり、彼をはたいていたからだ。

「なんてこと言つの！…あの一人は私にとつての大切な友達なんだよ！」

「そうです。そして、あなたに何かしてあげませんでしたか？」

「えー？」

「あの二人は、最後まであなたを気にかけていませんでしたか？」

泉の脳裏に、あの時の光景がよみがえる。

「お二人が亡くなつてショックでしうけど。あなたがそうやつて引きずつていては、あのお二人は悲しみますよ。瀬川さんは笑顔でいるから瀬川さんなんです。そのあなたが、泣いてばかりいはいけません。」

泉にはその時、美希の声が聞こえた気がした。

（私たちの分も生きて・・・・・・未来を頼むわよ。）

最後まで自分のことを気に掛け、そして想いを託した美希。

「・・・・・・」

「すぐには無理でしうけど。立ち直ってください。それが、二人のためです。」

結局、泉はそのまま黙り込んでしまった。しかし、ハヤテにはもう心配はないように思えた。

「瀬川さんを頼みます。」

「「はい。」」

ハヤテはそのまま部屋を出る。

すると、外が騒がしい。

「何だ？」

水兵たちが走り回っている中で、こんな声が聞こえた。

「また生存者だ！！共和日本の女性パイロットだ！！」

ハヤテの心の中に、まさかという想いが走った。

2度あることは3度ある。案の定、彼の予感は的中した。

水兵に背負われてやつて来たその人物みて、ハヤテは啞然としました。

「ヒナギクさん。」

ショートカットにしているが、かつてと同じピンク色の特徴的な髪。そして、その顔は見間違えられるはずもない。桂ヒナギクその人だ。

ハヤテの言葉に、サキや千桜も反応した。

「ヒナギクさん！？」

「生徒会長！？」

その一人が廊下に出た物だから、通路が塞ぐ形となつた。

潜水艦の通路は狭い。人一人が通れるのがやつとなのだ。

そのため、ヒナギクを背負つてきた水兵は立ち止まらなければいけなかつた。

「ちょ、何ですか飛曹長？道を開けてください。この人を医務室に

運ばなければいけないんです！？」

その水兵がいらだちながら囁く。

「せ・・・・その人はどこか怪我しているの？」

千桜が尋ねる。

「足に傷を負っています。もしかしたら化膿しているかもしれない
ので、急いで軍医に見せなくちゃいけないんです。さ、どうしてください。」

3人は部屋の中へと入り、通路を開けた。そしてその水兵はヒナ
ギクを医務室に抱きこんだ。

一方、ハヤテ達もしばらくして医務室へと入った。

いきなり3人が入ってきたために、軍医も驚いた。どうやらヒナ
ギクへの応急処置を終えて休んでいた所のようだ。

「な、なんだね君たちは！？」

「その人の知り合いです。怪我をしていると聞いたもので。押しか
けてすいません。」

ハヤテが答え、頭を下げる。

「ああ、そうなのかね。」

「それで、その人の具合は？」

ハヤテが尋ねると、途端に軍医の顔が険しくなる。

「はつきり言って、あまりよくない。足首に怪我をしているのだが、長い時間下半身を海水につけた状態で漂流していたようだからね、それがまずかった。バイ菌が入ってしまっている。応急処置はしたが、早く本格的な医療施設、最低でも病院船まで運ばないと。しかしだ……」

軍医が突然言葉を区切った。

それに反応したのはサキである。

「しかし、何ですか？」

「うん。足の具合はわざも行つたがはつきり言って悪い。いや、相当悪いと言つた方がいい。病院船に移しても……最悪、足は切断しなければいけないかもしれない。」

その一言に、3人は激しいショックを受けた。

「そんな……どうにかならないですか？」

千桜が声を荒げて言つ。

「私だつて何とかしてあげたいよ……けどね、潜水艦にある医療設備や薬は最低限の物しかないんだ。私に出来るのは応急手当と、痛みを和らげるために鎮静剤を打つてあげることぐらいなんだ。」

そう言つて軍医の顔も悲壮感を帯びていた。

結局、ハヤテ達にできることは何もなかつた。

ヒナギクを軍医に任せ、ハヤテは割り当てられた部屋で、無力感に打ちひしがれていた。

（田の前で・・・・・どんどん知り合いが死んで、傷ついているのに・・・・僕にはどうすることも出来ないなんて・・・・体僕は何じてるんだろ？）

そんな考えが頭の中をぐるぐる回っていた。

そんなことばかり考えている間も、時間は過ぎていく。

そして、間もなく夜明けと重なり、艦長の速水少佐がやって来た。

「本艦は30分後に駆逐艦と合流する。その駆逐艦が君たちを後方の病院船まで送る事になつていて。」

潜水艦は最高スピードで走つても20ノット（約37km）が精一杯であるが、快速の駆逐艦は30ノット（約55km）のスピードで走れる。つまり、ヒナギクもそれだけ早く病院船に移せるということだ。

「やつですか。」

そして艦長の言葉をおり、707潜は30分後に、駆逐艦と合流した。

カッター（小型ボート）を使ってハヤテ達はフロフからの駆逐艦に移乗した。

移乗すると、立派な髭を生やした中佐が彼らを出迎えた。

「よつ」。 「雪風」に。 私は艦長の寺内中佐だ。 密船ではないので狭いが、まあつうりでくれたまえ。」

その後、一応捕虜の身分である泉や千桜達はハヤテとは別の部屋へと案内されていった。

一方、ハヤテは部屋へと案内される前に寺内中佐からこいつわれた。

「それにしても君は運がいいね。この「雪風」は幸運艦として有名でね、乗り合わせた人間にも幸運が訪れると言われているだ。」

「はあ・・・・」

ハヤテはあまり信じる気にはなれなかつた。というか、生まれから彼にとつて幸運といつて文字はあまり縁のないものだつた。

「ではゆっくりと休んでくれたまえ。あいにくと宿部屋がなくて先客と同じだが、まあ我慢してくれ。」

そしてハヤテは指定された部屋と案内された。

しかし、彼の頭はやはり自分自身への無力感で一杯だつた。

だが、この時。既に彼は「雪風」の幸運をもらい始めていた。

雪風（後書き）

雪風は実在した駆逐艦で、寺内艦長も実在の人物です。

想い人

ハヤテが案内された部屋に入ると、ある人物がベッドに腰掛けていた。

「あー、ワタル君！」

「よう。潜水艦から移されたパイロットがいるって聞いて、もしかしたらと思っていたけど、まさか本当に会えるとはな。」

「けど、なんでワタル君がここに？艦隊へ戻ったんじゃなかつたんですか？」

ハヤテにはワタルが何故ここにいるのかわからなかつた。

「実はあの後燃料切れになつてな、そしたら運良くこの駆逐艦がいてな、側に着水したんだ。」

なんとも、いつも偶然が続くとハヤテ自身怖くなつてくる。

だが、今回は良い偶然である。ハヤテはワタルにサキがいることを伝える事にした。

「ワタル君。驚くでしょうけど、実はサキさんがいるんです。」

「えー、サキが……」の船に！？」

さすがにワタルにも驚きだつた。まあ太平洋のど真ん中で知り合いに偶然会えたなら普通そうであつ。

「ええ、彼女は空母の乗員として乗っていたんですが、撃沈されて漂流していた所を僕と同じ潜水艦に救助されたんです。あ、あと怪我はしていませんから安心してください。」

会えた上に怪我もないと分かつて、ワタルはこれ以上にないほど嬉しくなる。

「そうか、良かつた。」

ワタルは以前から、日本に残されたサキのことを気に掛けていた。彼としては、家族同然に付き合つてきた彼女の行方は、伊澄に勝るとも劣らないほどに気になる物であつたのだ。

「会いに行きますか？」

ハヤテの提案に、もちろん反対などはしない。

「もちろんだ！」

一人はサキ達が収容された部屋へと向かつた。

そして、数分後ワタルとサキは再会した。

「サキ・・・」

「わ、若・・・」

一人にとって3年ぶりの再会である。

サキは田に涙を溜めて、思わずワタルに抱きついた。

「えー、サキー？」

いきなり抱きつかれたので、ワタルの顔は真っ赤になってしまった。

「若、ご立派になつて。また会えて本当に嬉しいです。」

今ワタルは18歳の青年になつていて、分かれた時は15歳だったから、彼女には彼が随分凛々しく成長したように見えたのだろう。

「サキも無事で良かった。」

ワタルも嬉しさからか、涙を溜めるほどではないが田を潤ませている。

「ここまで知り合いが相次いで死んで、暗くなつていたハヤテの心も、このほほえましい光景を見たことで、ある程度和らぐ。」

しかし、喜んでばかりもいられない。

実際の所ヒナギクは足を切断するかの瀬戸際であるし、泉には再びつらいことであるが虎鉄達のことも伝えなければいけないのだから。そして、彼にはもうひとつの気がかりもあった。

その一方で、泉はハヤテの言葉もあってか、今は起き上がれるほどにまで回復している。ヒナギクは相変わらず鎮静剤のおかげで眠りについている。

サキとワタルは再会を喜び、千桜は愛歌が死んだ事に心を痛めながらも、自分が生きている喜びの一いつを心に抱えた複雑な心境にあつた。

そんな様々な人々の想いを乗せて、「雪風」はひた走った。

「雪風」が病院船の「氷川丸」と合流できたのはそれから3時間後であった。

「まだ眠つたままのヒナギクは担架」と「氷川丸」に移され、そのまま手術室に入れられた。後は、全員で彼女の幸運を祈るのみだつた。

ハヤテはその後、みんなとわかれて一人甲板に立つていた。

「氷川丸」は元々が客船であるから、施設はかなり良い。今ハヤテが立つてゐる場所も、景色が良く見えるようになつていて。

青い空に青い海。平和な光景である。つい昨日まで戦争をしていたなんて忘れさせる程に、太平洋は穏やかだつた。

景色に釣られて、ハヤテの心まで穏やかになつてくる。

そうしてみると、ある人物の顔が心に浮かぶ。

「お嬢様、どうしてるかな?」

自分が軍隊に入り、戦地へ赴くことを何より気に掛けてくれた少女。

執事になつたばかりのころは13歳だった彼女も18歳の年頃の女性となつた。ハヤテはそんな彼女に密かに恋心を抱いていた。

できることならプロポーズしたいとまで考えていた。しかし、今は一時的に没落しているとはいえ、相手は巨大企業のお嬢様。そんなかなうべくも無い夢と考えていた。

借金はなくなつたが軍人としては下士官に過ぎず、主と執事と言う関係であるのだから、彼女と結ばれることはないだろう。

それも運命。ハヤテはそう割り切つていた。

恐らく、戦争が終わつて三千院家に戻つても、自分がそこにいられる時間は短いだろうというのが、ハヤテの予測だった。

そんな事を考えていた彼は気付かなかつた、背後に一人の少女が立つた事に。

「ハヤテか？」

想い人（後書き）

「氷川丸」は横浜港に保存されている船です。

想いの交わり

「えー？」

ハヤテが振り返ると、そこには今ハヤテが考えていた女性が、従軍看護婦の格好を身にまとつて立つていた。

「お、お嬢様！？そんな、馬鹿なーー！」

ナギがここにいるはずはなかつた。彼女はハワイの三干院家の別荘にいるはずだ。なのに、びりじて。

しかし、ハヤテの思考がそつやつて困惑つてゐる間に、ナギはハヤテに抱きついていた。

「えーあー」

ただでさえナギがここにいる事に混乱しているのに、そこへいきなり抱きつかれたのだから、ハヤテの思考回路はショート寸前である。

そんな彼をよそに、ナギは一言もつわつた。

「ハヤテ・・・・・良かつた・・・・・会いたかつた。」

「えーあ・・・・・」

その言葉を聞いて、ハヤテは無意識にナギを抱いていた。

「本当にお嬢様なんですね？」

「ああ、私は正真正銘三千院ナギだ。」

確認した所で、一人は体を離した。

早速ハヤテがナギに聞く。

「お嬢様、なんでここにいるんですか？いつから従軍看護婦に？」

ハヤテは彼女が志願したことなど全く知らなかつた。

「お前が一度帰つてくる前に・・・・マリアと志願した。」

マリアまで志願していたとは、ハワイを出発する前に会つた時は二人ともそんなことおぐびにも出さなかつた。

「マリアさんまで・・・・どうしてそんなことしたんです？確かに赤十字は安全が保障されていますけど、前線に出るんですよ！！死ぬ確率は上がるんですよ！－それに、人の死を見る事になるんですよ！－」

「分かつてゐる。私の目の前で、一人死んだ。」

その瞬間、ナギの目が哀しい物になる。

よく注意してハヤテがナギの姿を見ると、白衣が所々汚れている。彼女が真剣にこの仕事をやつてゐる証である。

「お嬢様。どうしてそこまでして？」

「ごめんハヤテ。
れなかつた。」

ナギの口から出た意外な一言。

え！？

「ハヤテ一人だけを送り出して、私だけのうのうと安全に生きているなんて嫌だつた。お前のために何かしたい、お前に少しでも近づきたかつた！ それに・・・・・・」

ナギはそこで黙り込んでしまった。

「それに？何ですかお嬢様？」

「私はお前が好きだ！！」

ナギのその一言がハヤテの心、奥底にまで響き渡った。

（え！お嬢様が僕のことを？）

ハヤテはそんなことを考えてしまつ。一方、言つたナギは顔を真赤にしている。

「返事は良い。・・・・・ 私つて駄目な人間だな。こんな戦場のど真ん中で告白するなんて。不謹慎だよな。」

少しばかり自嘲氣味に言つナギ。

「お嬢様…………確かに不謹慎かもしだせんが、けど僕は今すごく嬉しいです。実は僕も「言つた！」

ハヤテの言葉はナギに遮られた。

「お嬢様？」

「今はいこう…………返事は戦争が終わってからでいい。ここでは言つたな。」

何故ここで言つたことをナギが忌諱するのかハヤテにはわからなかつた。ただ、直感的に感じたことがあった。

ナギはここで地獄を見たのかもしれない。もしくは相当辛いことをしたのかもしれない。断言は出来ないが、だからこそここでは出来ないのかもしれない。

「わかりました。」

ハヤテがそう言つた時、甲板を人が走つてくる音がした。

走つてきたのはサキとワタルだった。

「ハヤテ！！」

「どうしたんです？ワタル君？」

「うん。実は…………お前はナギ…………なんていっているんだ！？」

ワタルがナギに気付いた。一方のナギもワタルとサキを見て目を

丸くしてこる。

「お前じゃー、それにサキさんまでー。」

さつきまでなシリアルスな感じは一気に吹っ飛んだ。まるで、昔を見ているようだ。

3人とも狐に包まれたような表情をした。

「あの、詳しいことは後で話しますから、ワタル君、一体なんでしょうか？」

「ああ。じつはな、生徒会長なんだけど。手術は成功だ。足は切断せず、に済んだーー！」

「本当ですか？」

ヒナギクは「氷川丸」に移されて直ぐに手術室へと移されたが、なんとか足を失わずに済んだ様だ。

「よかったです。」

とりあえず一安心である。

一方状況が把握できていないナギは。

「おいハヤテ！足を失わずに済んだとはビックリだ？ なんでワタルやサキさんがここにいるの？」

「後でゆっくり話しますよ。」

結局、この時はナギが直ぐ後に呼び出されたため、夕方再び会うことを決めて話を打ち切った。

そして夕方、ヒナギクが運ばれた個室に、ハヤテ、ナギ、マリア、ワタル、サキ、泉、千桜ら一同が久しぶりに揃つたのであった。

想いの交わり（後書き）

御意見等お待ちしております。

意外な結末

「ええ！…ナギが従軍看護婦…？ちゃんと仕事出来るの…？」

「ヒナギクこそ、お前がパイロットだなんて信じられない…！」

お互いの姿を見て驚きあうナギとヒナギク。

「うーん、けど生徒会長の言つことも納得できる。マリアさんならともかく、お前が従軍看護婦なんて柄じやないぜ。」

「若、失礼ですよ。」

「そりだぞワタル！！」

いきなりあうなり、皆思い思いに話を始めた。まるで、高校生に戻った時のように。（戦前の高校は女学校や旧制高校という形で男女別でしたが、教育制度は現在と同じにしておいてください。）

全員にとって、久しぶりに見る光景である。しかし、かつてこうして談笑したメンバーの中に、既にいなくなってしまった人物が何人も出ることになるなんて、その時には考えも出来なかつただろう。

（西沢さん。朝風さん。花菱さん。霞さん。・・・・皆死んでしまった。それに、ヒナギクさんも切斷せずに済んだけど、しばらくリハビリが必要だし。）

ハヤテはそんなことを考えていた。

「けど、生徒会長が助かつて良かつたです。」

千桜が言つ。

「本当。ヒナちゃん良かつたね。手術が成功して。」

そうヒナギクに声を掛けるのは泉だ。理沙と美希の死で、廃人一歩手前まで行きかけた彼女ではあつたが、ハヤテの説得のおかげもあるだらう、今は大分回復している。笑顔もその表情に戻つてきた。

「ですけど、軍医さんの話では、半年ほどリハビリが必要だそうですよ。」

軍医から病状をしらされたマリアが言つた。

「良いんですよマリアさん。それくらい耐えて見せますよ。足を失わなかつただけ良かつたんです。だって私は今生きているんですから。」

明るく言つヒナギク。もつとも目覚めた直後、美希達の訃報を泉から聞いたヒナギクも泉同様最初はどん底に落とされたような心境になつた。ただし、泉から美希の言葉を聞かされたことと、自分が泉や千桜達に心配されていたことを知つたため、立ち直りも早かつた。

「けど、私たちこれからどうなるんでしょうね？」

いきなりそんなことを言つたのはサキである。

「多分、俺とハヤテは原隊（元いた部隊）に復帰して、サキたちは

ハワイに後送されるんじゃないか？一応捕虜の身分だし。」

ワタルが言つた言葉は「いやまつとうな意見である。ハヤテ達は兵隊であるのだから、戦えるのなら再び戦線に復帰しなければならない。また、サキやヒナ、ギク達は共和日本の兵隊であつたから、ハワイの捕虜収容所にいれられる可能性が高い。

「そうだよね、また離れ離れになっちゃうんだよね。」

泉がしんみりと言つた。

部屋の中の雰囲気に一気に伝染した。

これではまずこと思つたハヤテがある提案を思いつめ、言つた。

「だったら、今日はおもいつきり楽しみましょ。僕主計兵（お金や物の管理をする兵隊）に頼んで、ありつたけのサイダーや菓子を貰つてきます。」

メンバーに笑顔が戻る。しかしその言葉に、ナギが難色を示した。

「ハヤテ、ちょっと不謹慎ではないか？」

「そうかもしだせんが、もう一度とないかも知れないチャンスですから。」

ハヤテの言つよつて、この先再びこのメンバーが全員揃えるかなど、わからない。

「そうね、私たちがしんみりしてこちや、美希達も悲しむでしょう

し。」

病床のヒナギクも賛成した。

「…………わかった。けど、ハヤテお前お金はあるのか？」

例え軍隊内の物でも、お金はあいつ取られる。

「大丈夫ですよ。兵曹長の基本給に、飛行手当とか色々貰つていいますから。では、早速行つてきます。」

といつわけで、ハヤテは早速部屋からでた。

ところが、しばらく歩いてくると、なんだか周りが騒がしいのに気が付いた。

「なんだらう？」

病院船の中だから、急患とかで忙しくなるかもしれないが、なんかそれとは違つたような感じである。

ちよつと氣になる。

そこで、廊下の隅で話しかけていた水兵に声を掛けてみる。

「ちよつとすこません？」

「あ、何でしそうか兵曹長？」

「なんか随分慌つてますけど、何かあつたんですか？」

「えー、兵曹長は知らなかつたんですか？ 実は……」

「……？」

ハヤテは部屋に取つて返した。

手ぶらで息を切らして戻ってきたハヤテに、ナギが訝しく見た。

「どうしたの、ハヤテ？」

「そ、それが……戦争が終わつたそうです。」

「…………えー……」

遙かなる想い

戦争は呆氣なく終わつた。ソ連のスター・リン首相がスパイにより爆殺され、さらにそれに合わせるかのように、日本国内で反共クーデターが起きたからだ。

クーデター政権は僅か半日で東京全体を占拠し、その日の内に暫定政権を立ち上げた。スター・リンの死により混乱していたソ連にそれを止める手立てはなかつた。頼みのソ連太平洋艦隊も日米連合艦隊との戦闘で壊滅してしまつた。

暫定政権は全国士の帝国政府への返還を宣言し、この瞬間事実上戦争は終わつていた。

数十万というおびただしい犠牲を出した戦争は、皮肉にもたつた一人の人間の死が発端となつて終わつた。

こうした事実を多くの人々が知る事となるのは、戦後だいぶ経つてからだつた。

多くの人々は、戦争が終わつたことを喜ぶか、もしくはあまりに呆氣なく終わつた事に虚脱状態になつたかであつた。

「一体何だつたんだろ?、この戦争は?」

「氷川丸」のデッキに、ハヤテとナギの二人が立つてゐた。

ナギが呟いた言葉は、ハヤテも考へてゐることだつた。いや、

ハヤテだけではない。昨日まで戦場と言つ殺し合ひの場に身を置いていたヒナギクや泉、ワタルたち全員が考へてゐることだろう。

「まあ、僕にはまだわかりません。」

ハヤテにはわからなかつた。ただ、考へてゐるのは無駄な戦いであつたという考へをなんとか打ち消すことだけだつた。

結局の所、同じ日本人同士で殺し合ひをした末に手に入れた物は、かつてと同じ日本であつた。だつたら戦争なんかする必要はなかつたのではないかという考へは普通に浮かんでくる。

しかし、そうなると歩や宗谷、美希に理沙達死んだ者たちは一体何のために死んだのだろうか？ナギにつらい思いをさせた流浪の生活は一体何の意味があつたのか。

一人はジッと海を見つめる。この戦争で多くの命を飲み込んだ太平洋は、何も語つてはくれない。

「あのさハヤテ。」

「何でしじうか？」

「私たちはこれからどうするべきなのかな？」

ナギが言つた何氣ない一言。だが、それによつてハヤテの心中に生まれたある想いがあつた。

「僕は、一度と戦争が起きないよつこしたいです。」

日本に戻つたらの話を聞いたつもりであったのに、予想外のハヤテの返答に一瞬戸惑うナギ。

「え！？」

「今回の戦争で、沢山の人が死にました。その人たちの死を僕は無駄にしたくはない。僕は、西沢さんや宗谷君や花菱さんたちのようない理不尽に人の命が奪われる世の中を決して一度と繰り返させない。そうやって思いながら生きていきたいです。」

ナギはしばらく何かを考えこんで言った。

「私もそうして生きていきたい。」

この時の会話が、二人の人生を大きく変えた事は間違いない。

この後、日本は今度は連合国側としてナチス・独逸に宣戦布告したが、戦争はハヤテが再び戦場に出る前に終わつた。

ハヤテとナギ、そしてヒナギクらが戦前の平穏な生活に戻るのにそれから数年掛かつた。

ハヤテとナギは結婚したが、彼らは生涯、この時の会話を忘れることはなかつた。三千院グループは、人一倍従業員を気遣い、寄付や平和活動を行う企業として後々知られていいくこととなる。

ヒナギクや泉、ワタルたちもそれぞれ日本に戻つたが、彼らは年に一度は顔を会わせ続けた。自分たちが今生きている喜びと、散つていった仲間達への想いを確認するために。

遙かなる想い（後書き）

今回のシリーズも無事完結できました。読者の皆様に感謝します。
なお、当作品では史実の人物も出てきますが、あくまでフィクシ
ョンであることを改めてここに記します。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6788c/>

流浪の三千院家・・・・戦う執事

2010年10月11日00時53分発行